

中国初期王朝時代における王都の成り立ち

西江 清高*

本稿は、中国初期王朝時代に興亡した中原王朝（夏・殷・西周王朝）の王都を主な対象として、考古学的知見と伝世文献などの文字資料を参照しつつ、古代都市の諸相を概観するところみである。藤本強が平易に解説するように、西アジアやヨーロッパの都市は、主に交易を通じて地域の経済と生活の中心となる「市」を核として成立したが、東アジアの都市は、主に政治と管理の中心となる「都」をもとに成立したものであった。しかしでは、中国の都市（王都）が政治的中心であったことを、考古学的にはどのように説明できるのであろう。本稿はこのことを、初期王朝時代の王都の建造物としての構造と都市構成員の成り立ち、国家の政治的空間における王都の中心性、王都建設時における選地の思想などから論じてみた。

本稿でははじめに、初期王朝時代の都市の前段階にあった新石器時代後期の「早期都市」について、最近の考古学的知見を整理し、その性格を検討した。「早期都市」とは新石器時代の各地に並び立つ諸「地域」の中で、その中心的拠点として成長したものである。やがて中国大陆における地域間関係の再編成がすすみ、広域を巻き込んだ新たな地域間関係が形成された。このときはじめて地域間関係において「中心」となる「地域」が登場した。これが中原王朝の政体であった。中原王朝の王都とは、こうして形成された初期国家の首都として計画された都市であった。

本稿はもともと、人類史における中国的都市の比較考古学的な議論を念頭においたものであったが、そうした比較の視点に立つ前に、考古学的新知見が横溢する中国考古学の現状を鑑みて、いまなお定着した通説があるとも言えない中国古代都市論をめぐり、筆者なりに論点を整理した内容となっている。

キーワード

新石器時代後期の「早期都市」、宗教センター、中原王朝の形成、王都の選地思想、族邑、祖先祭祀、社祀、中原王朝の政治圏

* 南山大学

目次

- I はじめに
- II 新石器時代後期の「地域」的社会的衰退と中原王朝の出現
- III 新石器時代後期の早期都市
 - 1 良渚遺跡群（長江下流域）（前3300年頃～前2300年頃）
 - 2 石家河遺跡群（長江中流域）（盛期は前2500年頃～前2200年頃）
 - 3 石峁遺跡（西北地区黄土高原）（前2300年頃～前1800年頃）
 - 4 陶寺遺跡（黄河中流域）（前2300年頃～前1900年頃）
- IV 中原王朝の王都
 - 1 二里头遺跡（夏王朝の王都）（前1700年頃～前1500年頃）
 - 2 偃師商城遺跡、鄭州商城遺跡（殷王朝前期の王都）（前1500年頃～前1350年頃）
 - 3 殷墟遺跡（殷王朝後期の王都）（前1350年頃～1050年頃）
 - 4 周原遺跡（西周王朝の王都）（前1050年頃～前771年頃）
- V 小結
- VI 王都を構成した「族邑」群
 - 1 二里頭の王都を構成した「族邑」群
 - 2 殷墟の王都を構成した「族邑」群
 - 3 周原の王都を構成した「族邑」群
- VII 都市の住人をまとめていたもの
 - 1 祖先祭祀の遺構
 - 2 社祀の遺構
- VIII 中原王朝王都の選地思想
 - 1 周原の建設
 - 2 豊邑・鎬京（豊鎬）の建設
 - 3 洛邑（成周）の建設
 - 4 夏王朝、殷王朝における王都の選地
- IX 政治圏の中心としての王都
 - 1 二里头文化期の中原王朝（夏王朝）政治圏の成り立ち
 - 2 殷王朝、西周王朝に受け継がれた政治圏の3重構成
- X おわりに

I はじめに

本稿は、中国初期王朝時代（夏・殷・西周王朝の時代）に興亡した中原王朝の王都を主な対象として、考古学的知見と伝世文献など若干の文字資料を参照しつつ古代都市の諸相を概観するところみである¹。

近年、新石器時代後期²（前3000年から前1700年前後）の中國大陸華北・華中の各地において形成された、複雑化した「地域」的社会的すがたが明らかにされてきている。その地域的社会的中心として登場した拠点集落は、中國大陸に現われた最初の都市的性格をそなえた大規模集住地として「早期都市」とも呼ばれ、一つの用語として定着しつつある。早期都市は、前1700年前後に中原王朝の王都が登場する前段階において、新石器時代後期の地域的社会的なかに出現した

中國大陸最初の本格的な都市であった。その後に登場する中原王朝の首都としての王都の性格を考えるうえでも、先行する早期都市についての理解は重要な前提となる。本稿では、この早期都市の基本的な性格についても考古学的知見とともに若干の考察をくわえておきたい。

早期都市の出現から中原王朝王都の登場にいたる時代とは中國大陸で初期国家の形成が進行した時代であり、歴史の舞台が転換し、いわゆる「中国」文明の基礎が形成した時代でもあった。初期王朝時代の王都の成り立ちを考えるにあたり、こうした時代の背景にあった社会や文化の動きについてもある程度整理しておく必要がある。

都市に関して本稿で取り上げることができる論点は限られたものに過ぎない。これまで多くの中国古代都

¹ 主に西アジア研究の蓄積から深められてきた G. チャイルド以来今日にいたる考古学的な都市論〔小泉 2013 参照〕をふまえつつ、人類史の比較の視点に立つことは、中國大陸を対象とした古代都市研究においても、従来の研究の枠組みを再考させることにつながるものと期待される。しかし本稿では、そうした比較の視点に立つ前に、古代都市に関する考古学的新知見が横溢する中国考古学の現状を鑑みて、いまなお定着した通説があるとも言えない古代都市論をめぐり、筆者なりに論点を整理しておきたいと考えてみた。なお本稿で都市と言うとき、それは一般的な集落に比べて、人口および経済的、政治的、宗教的活動の高い集中と中心化が指摘できる拠点集落のことであるが、議論はなお未成熟であり、都市を考古学的に定義づけることにはなっていない。本稿は、筆者も参加させていただいた南山大学人類学研究所公開シンポジウム「国家なき都市と都市なき国家—古代文明を「再構築」する—」（2020年2月24日）において目指された、人類史における都市の比較考古学的な議論をふまえた内容となる予定であったが、じっさいにはその目標からはずいぶんと後退している。それでも古代都市の比較研究に、中国文明圏の事例から若干の話題が提供できるのではないかと考えている。

² 中国の考古学では、前3000年～前2000年前後を新石器時代「末期」、前5000～前3000年前後を新石器時代「晩期」と呼ぶことも多いが〔中国社会科学院考古研究所編著 2010: 802〕、本稿では日本での先行研究〔小澤ほか 1999: 83；宮本 2020: 108 など〕にならって「末期」を「後期」と呼び、「後期」を「中期」と呼ぶことにする。時期区分の呼称についても、その実年代の目安についてもさまざまな説がある。本稿で使用する時期区分や年代については巻末に付した略年表（表2）を参照のこと。

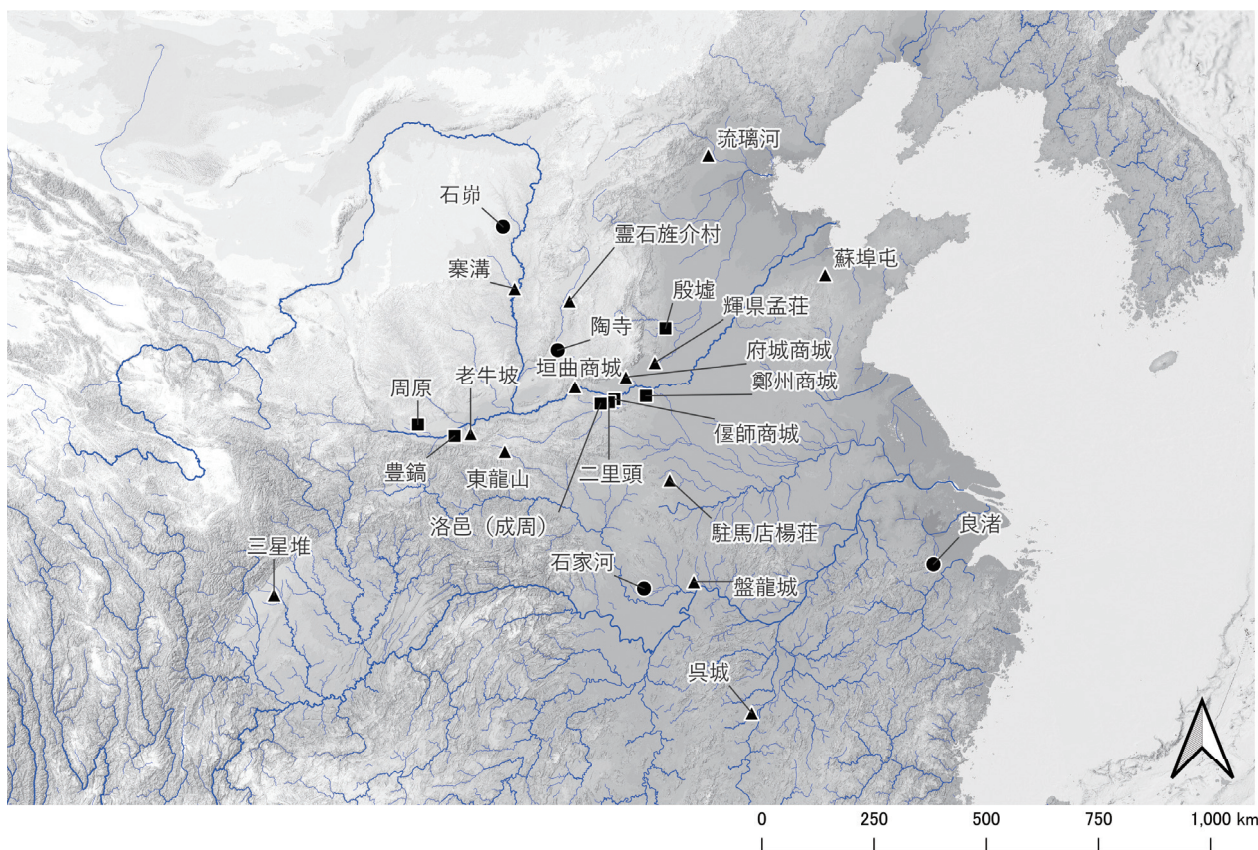


図1 本稿で扱う主な都市遺跡と拠点集落址

●早期都市 ■中原王朝の王都 ▲初期王朝時代の地方都市あるいは拠点集落

市論において議論の中心とされてきた城壁、宮殿建築、道路網、中軸線など建造物としての都市の構造に関する論点について、本稿では部分的な言及にとどめる³。また、近年筆者自身が、なお未成熟ながらも強調してきた、都市本体の中核空間とその周囲にあって都市本体を補完する諸集落が配置された空間からなる「都城圏」という考え方〔西江 2019a: 125-126など〕についても、本稿では特に論ずることはしない。

以下の各章のうち、IIでは、早期都市が出現した新石器時代後期から初期王朝時代の開始にいたる「中国」文明形成の初期の状況について、それが「中国」的な都市誕生の背景にあることを考えて、簡略に整理しておきたい。III、IVでは、新石器時代後期の早期都市と初期王朝時代の王都について、代表的な遺跡を紹介し、そこから見えてくる早期都市と中原王朝王都の相違について確認する。VIでは、中原王朝の王都の基本的な成り立ちが、血縁的紐帯を背景とした「族邑」と呼ばれる集落的単位が集まった空間であることを示して、

都市の「族邑」モデルと呼ばれるものを紹介する。VIIでは、中原王朝の王都において、族邑の内部、族邑と族邑、族邑と王室との結束や連帯を生み出す背景にあったものを考えてみたい。VIII、IXでは、国家と王都の関係をめぐって、中原王朝の王都が政権の政治的な判断によって建設された都市であり、国家の構造を前提として建設された都市であったことを、都市建設の経緯と、王朝政治圏における王都の中心性などから検討する。

II 新石器時代後期の「地域」的社会的衰退と中原王朝の出現

早期都市が現れた新石器時代後期とはどのような時期であったのだろうか。この時期において、社会の複雑化、階層化がすすみ、さまざまな程度に地域の統合もすすんでいた「地域」的社會を、早期の「国家」と呼んで論ずる研究者も少なくない。またそこに認めら

³ 建造物としての都市の諸要素を中心に考古学や文献史料から検討した重要な研究は、古典的となった先行研究をふくめて枚挙にいとまがない。近年における総合的な研究の代表的例として、劉慶柱 [2006]、許宏 [2016b、2017] をあげておく。

れる社会や文化の様態を評価して、「新石器時代文明」、「地域文明」、「地方文明」などの呼称をもちいる研究者もある⁴。筆者は以前、中国考古学を概論した際に、新石器時代後期の地域的社会について、「発達した首長制社会ないし初期国家の原型」と、あえて曖昧に述べたこともあった〔西江 2003: 96-97〕。その表現は現在でも妥当なものと考えているが、近年の考古学的新知見をふまえて、そうした地域的社会を「国家」ないし「初期国家（早期国家）」として論ずる研究者も増えている。国家形成をめぐる研究状況について筆者は、いまは急増する考古学的新知見を的確に評価しながら、新石器時代後期以降の社会と文化を説明する「国家」の概念と国家形成のモデルを再点検するときであろうと考えている。

新石器時代後期の首長制社会なり初期国家なり、あるいはまた早期都市を考えるさいに、注目されることの一つは王権の存在についてであろう。これに関して筆者は、新石器時代後期の発達した地域的社会と、その中心をになう早期都市において、地域的社会の支配層ないし貴族エリート層の墓地が確認されることは少なくないが、隔絶した権力の表れである王墓の存在は明確ではないと考えている。一方、初期王朝時代においては、少なくとも殷王朝後期の王都である殷墟遺跡において、圧倒的に巨大な墓壙を掘削した疑問の余地のない王墓群が都市の外縁部に造営されている。顕著な王権と王位の継承（王統）が確認できるかどうかは、現時点で新石器時代後期の地域的社会と初期王朝時代の中原王朝についての考古学的評価の違いとして指摘

しておきたい。

しかし筆者は、新石器時代後期と初期王朝時代の相違というときに、そうした階層化の深まりや権力の形成といった社会進化のようすとは別の側面にむしろ注目している。それは前三千年紀から前二千年紀にかけて、中国大陆における地域間関係のあり方が大きく変化したという歴史の舞台転換に関するものである。

1970～80年代にかけて中国新石器時代研究の潮流は、それまでの主流であった中原地区の先進性や中心性を前提とした一元論的な思考〔楨林 2013〕から、地域ごとの文化伝統の多元性と中国文明の多元的な成り立ちを主張する思考へと大きく変化した。蘇秉琦らが提唱した「区系類型論」〔蘇秉琦・殷偉璋 1981〕〔蘇秉琦 2004: 33-100〕は、この新たな研究の方向に考古学的な基礎を与えるものであった⁵。1986年にはハーバード大学の張光直が、自身のそれまでの一元論的な研究を見直して、多元的な新石器時代の諸地域が新石器時代後期には「中国相互作用圏」（Chinese Interaction Sphere）を形成するというモデルを提唱した〔Chang, 1986〕。影響力の大きなこれら研究者の提言もあって、中国における新石器時代研究のその後の研究の方向性がかたまったと言える。多元的とされる新石器時代諸地域の文化（土器から設定される「考古学文化」）はまた、「地域」的な文化の単位であるだけでなく、「地域」的な社会の単位としても議論されるようになる。蘇秉琦らは区系類型論を前提に、「中国的な特色」を強調した「古国—方国—帝国」という社会の発展段階的な考え方〔蘇秉琦 2004: 131-172〕を

4 「新石器時代文明」は〔中村編 2023〕、「地域文明」（中国では「地区文明」とも表記）は〔張海 2022〕、「地方文明」は〔趙輝 2000〕などで使用されてきた。また「地方文明」について中村慎一は、「新石器時代晩期には中国各地に、筆者が地方文明と呼ぶ都市文明が開花する」と述べている〔中村 2023〕。

5 新石器時代の中国大陆に六つの地理的な「区」（燕山南北・長城地帯中心の北方、山東中心の東方、閩中・晋南・豫西中心の中原、環太湖中心の東南部、環洞庭湖・四川盆地中心の西南部、鄱陽湖・珠江三角洲中心の南方）を見出し、それぞれの「区」は自律的な考古学文化の「系」（系統）をもっているとされた。区系内の細分単位が「類型」である。同じ区系内にあっても類型間には不均衡があり、一方、区系の相互間には交流と影響の関係があった。区系類型は、歴史時代初期の春秋戦国時代の諸「国」の成り立ちにも関係するものと考えられた。区系類型論は1970年代以降急速に進展した中国各地での新石器文化の発見と研究を背景として、中原中心の一元論にかわり、多元的な地域的文化をとらえる枠組みとして提唱され、中国文明の形成を多元的なものの一体化への過程として説明する基礎を提供した。

提唱して⁶、中国の学界において広く受け入れられてきた⁷。

1990年代以降、長江下流域の良渚遺跡、長江中流域の石家河遺跡、黄河下流域の山東龍山文化の城壁集落群、黄河中流域の陶寺遺跡、さらには西北地区黄土高原の石峁遺跡などに代表される新石器時代後期の「地域」的社会的拠点集落の様相がしだいに明らかにされてきた。その結果、新石器時代後期の「地域」的社会的拠点集落が、従来の理解をこえて、大きな人口を擁する複雑化した社会を反映したものと見なされ、同時にそれぞれの「地域」内の社会的統合も進行していたと考えられるようになった。近年では、先にもふれたように、なお十分な議論や定義を経たものとは言えないが、新石器時代後期の「地域」的社会的拠点集落は「早期都市」と呼ばれることも多く、早期都市を中心として発達した「地域」的社会的拠点は、「初期国家」として論じられることも少なくない。

新石器時代後期の「地域」的社会的拠点では、各種の威信財、たとえばその顕著な例として、多くの「地域」で固有の特色をもつ玉器類が権力者のもとで製作された。玉器に代表される諸「地域」の文物は、その製品または文物に関わる思想や情報が、「地域」の枠をこ

えて行き交うようにもなり、それが外来のものとして受容されるとき、威信財としての価値をさらに高めたことであろう。それは張光直が言うところの中国相互作用圏の一つの側面とも考えられる。玉器のあるものは黄河下流域の山東龍山文化に由来し、そこから黄河中流域を経由して西北黄土高原の「地域」的社会的拠点へと波及し、またあるものは長江中流域の石家河文化に由来してそこから北方の黄河中流域を経由して、さらに黄土高原の「地域」的社会的拠点にまで波及する動きがあった。また、長江下流域の良渚文化は、龍山文化併行期の新石器時代後期後半の文化よりも早く、前2300年頃までには衰退したが、良渚文化を特徴づける高度な玉器類とそこに込められた思想や情報は、おそらくは「過去の成功した社会の記憶」を象徴するものとして、長江流域、黄河流域の遠隔諸「地域」で威信財として受け入れられ、その影響は前1700年前後に始まる初期王朝時代においても存続した⁸。

以上のような地域間の関係は、横並びの関係にあった諸地域が互いに繋がりあってモノや情報が、場合によっては人の移動や移住をとともなうかたちで交流した関係であった。新石器時代後期における「地域」の枠を越えた威信財を中心とした交流は、送り出す側、受

6 区系類型論による中国大陆新石器時代の「地域」的文化（「古文化」）の多元性を前提として、ほぼその区系ごとに固有の社会発展が進行し（「古国」→「方国」）、一方で多元的な文化と社会の一体化が進んで（「方国」→「帝国」）秦・漢帝国が出現した。この古国→方国→帝国という三段階を蘇秉琦は「三部曲」と名付けた。蘇秉琦の言う「古国」は、「今より5000年ほど前に、「古文化」が系統的に発展できた各地に」[蘇秉琦 2004: 148]、拠点集落とともに続々と出現したとされる。古国に続いて今から4000年ほど前、中国大陆の各地は方国の段階に入ったという。「方国はすでに比較的成熟した」国家であり、「夏殷周（中原王朝）はみな方国の君であった」[蘇秉琦 2004: 148]とされる。方国の概念には「国々」が同盟、連携するという側面がふくまれ、中原王朝もそうした方国のリーダーとなった方国の一つと考えられているのである。方国は、すでに新石器時代後期には一部地域（良渚文化、夏家店下層文化など）では現れていたとされ、初期王朝時代には典型的な政体のすがたとなり、秦・漢「帝国」の出現にいたるまで継続発展した。蘇秉琦は一方において、国家形成の類型として「原生国家」、「次生国家」、「統生国家」という三つのモデル（「三模式」）を提唱する。原生国家とは地域的な「古文化」の基礎のうえに、独自に生成した原初的な国家のことである。次生国家とは外部にあった原生国家などの影響を吸収して生成された国家のことで、中原王朝もこの範疇に入るとする。蘇氏の次生国家は、日本列島を念頭に言及されることも多いいわゆる二次国家（すでに存在している近隣の国家からの影響下に成立した国家）の概念とはすこし違いがある。また、統生国家とは秦・漢帝国以降の歴史時代において、中国北方の遊牧民や狩猟民のうち自律的に古国—方国—帝国の発展をへて中国的世界に参入した存在（鮮卑、契丹、清朝など）を指すとされる。蘇秉琦は以上の「三部曲」と「三模式」の両面から「中国」文明の全体像を説明しようとしたのである。蘇秉琦の提唱は、国家形成の考古学的理論というよりも、「中国」文明の成り立ちをめぐる歴史観の提唱というべきであろう。蘇氏の提唱は同氏晩年の講演や口述の記録が中心となっており、詳細な議論を整理した論考とはなっていない。1990年代後半以降、多くの研究者が蘇氏の提唱をとりあげて、各自の解釈をくわえた議論が繰り返されてきた[俞偉超 2001][林滢 2016]。重要なことは、蘇秉琦の提唱は国家形成への発展段階を語る一方で、方国—帝国の展開によって多元的な地域文化と地域社会が統合される過程として「中国」文明の形成を語ったことである。なお、蘇氏の多元一体の思考は、現代中国の民族論・民族政策にも影響をあたえたとされる[費孝通編著 2008]。

7 なお、中国的であることを強調する蘇秉琦らの議論とは別に、より一般化された考古学理論と比較考古学の視点に重きをおいた劉莉、陳星燦をはじめとする国家形成をめぐる議論[劉莉・陳星燦 2002][Liu, & Chen, 2003, 2012]もまた、中国の内外で広く参照されてきた。

8 中原王朝の玉器の組成に良渚文化に由来する顕著な影響はないが、この時期に長江上流域の四川成都平原で大きな「地域」的社会的拠点を形成した三星堆文化—十二橋文化（前二千年紀前半～前一千紀初葉頃）が注目される。三星堆文化では前二千年紀前半の開始期から良渚系の玉璧（石璧）、玉琮などを威信財（おそらく「神殿」の祭祀で使用された）として数多く製作している。同時に三星堆文化は、中原王朝（二里头文化）の高級な玉器である玉璋（牙璋）もまた模倣して数多く製作している。すでに500年前後も過去の良渚文化由来の玉器や、同時期の中原王朝由来の玉器は、新石器時代以降の後発的な「地域」的社会的拠点と考えられる三星堆文化—十二橋文化の支配層が求めた「成功した社会」に由来する外来の威信財であったと思われる。

け取る側それぞれの「地域」の支配層、エリート層の目的に沿うものとして重要性を増していたであろうが、その交流の地理的範囲はなお限定的であった。また、玉材・石材に代表されるような自然資源の交易については、威信財となる玉材等の一部が交易された可能性が指摘されることはあるものの、一般的な生活レベルの物資となる石器素材等について、地域をこえる交易関係はどこにおいても確立されていなかった。

横並びに関係しあう新石器時代後期的な地域間関係は、やがて前二千年紀前半における中原王朝の形成過程において再編成され、二里頭文化の登場とともに中原地区を「中心」の政体とする新たな地域間関係が中国大陆の広域を巻き込んで形づくられた⁹。初期王朝時代の「中心」と「周辺」の地域間関係とは、そのネットワークのパターンが放射状であることを特徴としていた¹⁰。そのときの地域間相互の関係は非対称な交流関係でもあったと推測される。またそれは商業的な交易活動の関係性をふくみつつも、緩やかな政治的側面をとまなう支配層相互間の関係性が主要なものであったと思われる¹¹。

中原王朝を中心とした、「中心」「周辺」の関係圏の地理的広がりとは、のちに秦・漢帝国の時代に歴史の表舞台に現れる「中国」的世界の地理的な原型を準備したものと考えられる〔西江 2019b、2021〕。

それでは、最初の中原王朝（文献に見える夏王朝）の出現過程とはどのようなものであったのだろうか。考古学文化としての二里頭文化（一期～四期）を、かりにその政体の地理的投影として見るならば、はじめは黄河本流の南側（嵩山南北）において形成された。やがて二里頭文化が黄河本流の北岸にも拡張して、黄

河中流域の兩岸地帯つまりは中原地区の全体を政体の範囲とするようになる（二里頭文化二期以降）。このとき以降、洛陽盆地にあった拠点集落の二里頭遺跡には、宮殿・宗廟とされる大型建築物やその宮殿・宗廟区を囲む牆垣、さらには道路網や手工業工房区などが整備され、王都にふさわしい都市中核部のすがたを呈するようになった。後世の文献を参照して推測される夏王朝の王統の開始は、二里頭の都市建設よりも若干古く遡ることも考えられるが、華北・華中の広域を巻き込んだ地域間関係の「中心」地域として中原王朝の政体が確立し、同時に王朝の首都としての王都（二里頭遺跡）の形態が整うのも、この二里頭文化二期以降のことであった。

こうして、中国大陆の華中と華北という南北の両方面は、中原王朝の王都を結節点として緩やかに結びつき、一方、黄河中・上流域と黄河下流域という東西の両方面もまた王都を結節点として緩やかに結ばれる状況となった。新石器時代の華北的（アワ・キビ雑穀農耕）な初期農耕社会からみればその南部の「周辺」であり、華中的（稲作農耕）な初期農耕社会からみればその北部の「周辺」であった中原が、中国大陆の「中心」に転換するという歴史の舞台転換がそこに現れる。

中原王朝の出現を説明するとき、新石器時代における地域的社会的複雑化の程度、地域的社会的統合の程度において、いわば立ち遅れていた中原地区を、「中心」の地域へと転換させた背景について考える必要がある。前三千年紀中頃以前に、非常に発達した様相を見せていた長江下流域の良渚文化であったが、他の諸地域よりも一足早くに衰退した。前三千年紀後半の山東

9 二里頭遺跡の発掘担当者でもあった許宏はその著書で、二里頭文化と二里頭の王都の出現は、（新石器時代後期の）互いに競合する政体の併存の状況から「広域王権国家」の段階に入ったことを示すと論ずる〔許宏 2016a〕。

10 単に外形的なアナロジーにすぎないが、通信ネットワークの分野で言われるノード（結節点）を結ぶネットワーク形態の分類（ネットワークトポロジー）を参照するならば、新石器時代後期の地域間関係は「メッシュ型」、「中心」をもつ初期王朝時代の地域間関係は「スター型」のイメージに近い。また、初期王朝時代の中原王朝政治圏の外周（「外域」）に位置した諸地域の相互が、大きな距離を隔てて同心円状に交流した関係性が指摘でき〔西江 2021〕、「スター型」ネットワークの外を取り巻いて「リング型」の地域間関係も形成されていたと考えられる。

11 最初の中原王朝の王都である二里頭遺跡には、遠隔地からの製品や自然資源が集まり（南シナ海ないしインド洋産の海貝、長江下流域の先進的手工業製品であった硬陶・原始瓷器、長江中流域の玉器および緑松石原料、長江兩岸地帯あるいは華北産の銅原料、黄河北側の塩資源など）、また華北各地に由来する特徴ある土器（例えば陶鬲）が二里頭の王都で受容された（王都以外の一般集落では外来系土器はほぼ皆無）。一方で、遠隔地の各地域は、二里頭文化に由来する文物を輸入または模倣するなどして受容し、そのあるものは地域の支配層の威信財となった。陶礼器（二里頭社会内の中位の支配層が所有した精製土器）が東北地区や長江上流・中流・下流域の各地で模倣され、獸面牌飾など一部の青銅器が黄河上流域、長江上流域（四川三星堆）の各地域で受容された。また、牙璋（玉璋）は、牙璋のもう一つの拡散中心であった西北地区の陝西省北部とともに、西南地区の四川盆地、ベトナム北部、嶺南地区、福建などへ影響したことが指摘される〔鄧聰 2018〕〔西江 2021〕。先に指摘した、中原王朝政治圏の外周（「外域」）にあった諸地域相互間の「リング型」のネットワークを反映した関係性である。

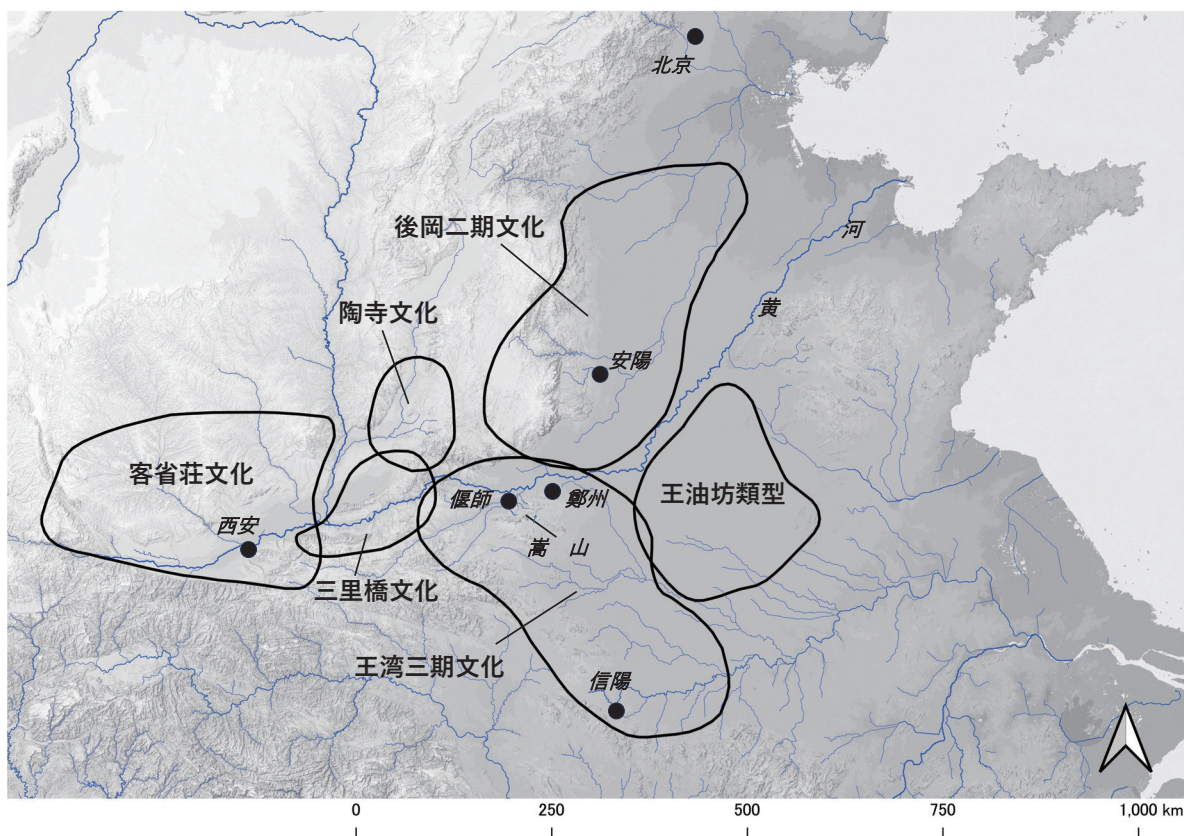


図2 新石器時代後期中原地区周辺の考古学文化

〔董琦 2000: 19〕より作図

龍山文化は、その高度な土器文化が変質して前二千年紀の岳石文化へと移行し、山東地区の城壁集落群¹²は減少して地域的社会的統合や階層性もあいまいになった〔渡部ほか 2023〕。同時期の石家河文化、陶寺文化、客省莊文化などにおいても早期都市や拠点集落の衰退あるいは廃棄が見られた(巻末の略年表、表2参照)。

前2000年前後に、そうした地域的社会的顕著な退

潮現象が進行するなかで、中原地区の王湾三期文化やその東の王油坊類型などにおいて¹³比較的小規模ながら城壁や環壕をもつ拠点集落¹⁴が、おそらく互いに緊張関係をつくり出しながら比較的短期間のうちに興亡を繰り返し、中原地区で地域の統合が進んだ¹⁵。その過程において中原地区東方の山東龍山文化、北方・西方の陶寺文化、黄土高原の龍山文化や齊家文化、南

¹² 新石器時代後期の山東地区では大汶口文化—山東龍山文化が広範囲に分布していたが、他の地域とは違って山東地区全体が一つの早期都市を中心に政体としてまとまる様相ではなく、比較的小さな地域単位に分かれて複数の中小規模の拠点集落(城壁をもつ)が集めた集落分布を特徴としている。「地域」の中心としての早期都市の存在が明確ではないこともあり、本稿では山東地区の拠点集落を早期都市として取り上げていない。しかし、山東地区における新石器時代社会が十分に複雑化していたことは明白であり、そこに生成された新石器時代後期社会と政体の実相を論ずるには、いまだ少し調査と研究の深まりを待ちたい。

¹³ 新石器時代後期の中原地区とその周辺には、黄河以南を中心に王湾三期文化(嵩山以北の王湾類型、嵩山以南の煤山類型に細分される)が分布し、その東隣りに王油坊類型、西隣りに三里橋類型が分布した。さらに中原地区の黄河以北の西北に陶寺文化、東北に後岡二期文化が展開した(図2)。

¹⁴ 主に嵩山以南あるいは以東に出現した城壁あるいは環壕をもつ拠点集落として、王城崗、瓦店、古城寨、新砦、人和寨、蒲城店、郝家台(以上、王湾三期文化煤山類型)、平糧台(王油坊類型)などが知られる(図3)。これらの集落遺跡では、集落の方形プラン、回廊式の大規模建築、青銅製容器の鋳造、「龍」の形象など、のちの中原王朝の王都に継承される重要要素の萌芽も指摘される〔許宏 2016a〕。

¹⁵ 中原王朝の二里头文化は、基本的に王湾三期文化を継承したものと考えられるが、王湾三期文化から二里头文化への過程は単純なものではなかった。中原地区における文化の動態、地域社会の動態は、王湾三期文化と、それに後続した新砦文化(新砦類遺存、新砦期とも呼ばれる)および二里头文化(一期)などが比較的短期間のうちに台頭、対峙、融合、衰退を繰り返したと考えられる(表1)〔許宏 2016a〕〔魏繼印 2019〕。この過程で中原地区内に点在した拠点集落はそれぞれが中原地区外部の東方、南方、北方などからの影響を受容しつつ互いに競合し、盛衰を繰り返すという動きを経て、最終的に嵩山以北の洛陽盆地に中原地区全体の中心となる中原王朝の王都が登場した。中原地区一帯が統合される過程の多くのことがなお未解明である。近年の総合的研究としては張海[2021]などがある。

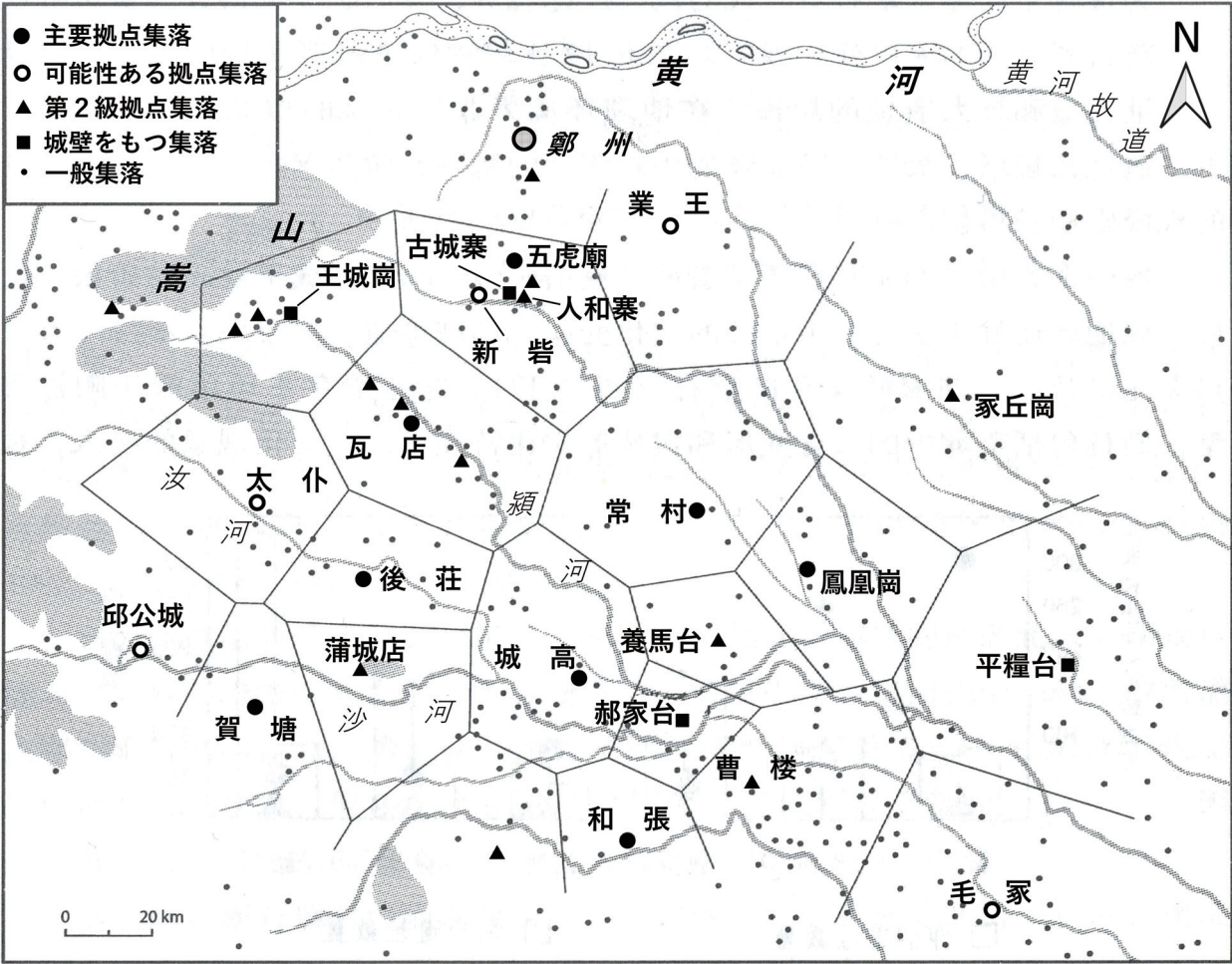


図3 王湾三期文化とその周囲の集落遺跡
[劉莉 2007: 169] より一部改編

表1 王湾三期文化、新砦文化、二里头文化一期の関係
[魏繼印 2019: 324] より一部改編

遺跡 分期	新砦	黄寨	古城寨	牛砦	馬莊	豎河	花地嘴	灰嘴	王城崗	瓦店	郝家台	蒲城店	煤山	白元	東干溝	小潘溝	姪李	西呂廟	東楊	王湾
一										一期	一期									
二										二期	二期		一期							
三	龍山一期		二期			龍山一期			一期	三期	三期									
四	龍山二期		三期			龍山二期			二期	四期早段	四期早段					龍山早期	二期		一期	三期
五	龍山三期		四期		龍山			龍山	三期	四期晚段	四期晚段		二期	一期		龍山晚期	三期	龍山早期	二期	
六	龍山四期					龍山三期			四期	四期晚段	四期晚段		三期			龍山晚期				
七	新砦中期	一期		新砦遺存			新砦遺存	龍山	五期	五期	五期	龍山	四期早段		龍山			龍山晚期		
八	新砦晚期	二期早段			新砦遺存	二里头一期			六期	六期	六期	過渡期	四期晚段	二里头一期	二里头一期					
二里头一期		二期早段				二里头一期		二里头一期	二里头一期	二里头一期	二里头一期	二里头一期		二里头一期	二里头一期					
王湾三期文化 新砦文化 新砦文化の影響を受けた王湾三期文化 二里头文化一期																				

方の石家河文化など外部地域に由来する文化要素の受容が中原地区に大きな作用を生み出すようになっていた〔許宏 2016a: 108–111〕〔張海 2021: 187–191〕。最終的に洛陽盆地に拠点集落をおいた二里头文化が成立し、中原王朝の基礎が確立したと考えられる。

中原王朝の台頭は、その表裏の関係として華北・華中の新石器時代後期の「地域」的社会的な瓦解や衰退があった。その原因の一つとして、前三千年紀後半に繰り返された気候変動（4.2ka イベント）があったと推測される。他方で、同じ気候変動のなかであって、ではなぜ中原地区の社会は継続して発展したのかを考えなければならない。一つの考え方として筆者は以前、華北・華中の多くの「地域」では完新世中期の安定した温暖期において、地域内の等質的な自然環境に適応して単作型のモノカルチャー的な初期農耕社会を成長させたことが、社会統合の規模を肥大化させた一方で、環境変動への脆弱性を増長させていたと推測した。それとは対照的に中原地区（黄河以南の嵩山南北）では、華北的な雑穀天水農耕を主としながらも多種の栽培植物の利用が比較的早くから定着し、その多様性ゆえに農業の経営単位は小規模であって、大規模な社会の統合には直結しないが、環境変動に対する比較的つよい耐性（レジリエンス）をもっていたことを推測した¹⁶。

そのうえで、中原地区という場所が、華北・華中の地域間関係の「中心」となった理由として、交通の結節点としての地理的位置が指摘できる。黄河本流の中流部にあたる中原地区は、上流部や下流部に比べて安定した渡河・徒渉地点が集中することによって、南北、東西の遠隔地間のアクセスに有利な地理的・地勢的特異点としての優位性をもっていたことが指摘できよう〔西江 1995〕。中原王朝出現の過程をめぐるさまざまな研究課題については、最新のデータをふまえて、さらに総合的に論ずる必要がある。

以上に概略を述べた中原王朝形成前夜の文化や社会の動向をふまえるならば、新石器時代後期の早期都市の基本的性格の一つは、等質的な環境を基盤に成長した地域的社会的な中心であったということになる。一方、初期王朝時代の王都とは、多元的な華北・華中の広域を巻き込んだ緩やかな地域間関係が形成されるなか、その中心となった政体（中原王朝）の首都として建設されたということになる。

III 新石器時代後期の早期都市

「水城」、「土城」、「石城」という表現がある。中国古代都市を総合的に研究した許宏が、本稿に言う早期都市の時代の華北・華中に見られた大型集落の特徴を、各地の自然環境の違いから述べた簡潔な表現である〔許宏 2017: 69–71〕。「水城」とは長江中流域、下流域の水稻耕作地帯に広く見られ、河川や湖沼の水を引き入れた渠や環濠とその内側を囲む土城壁（円形プランが多い）をともなう大型集落のことである。水郷的環境に適応した稲作農耕地帯であって、豊富な水の恩恵を受けつつも水害対策の水利システムを必要とした集落の形態であった。「土城」とは黄河中流域、下流域のアワ・キビなど雑穀主体の天水農耕（旱地農法）をおこなう平原地帯であって、河川・湧水など生活水が得やすい土地を選択し、版築による土城壁（長方形、方形プランが多い）をともなう集落形態のことである。「石城」とは、西北地区の黄土高原特有の地形に対応して、積石による周壁を築いた集落のことである。乾燥した環境下の西北地区は、新石器時代後期以降、天水農耕にくわえて牧畜を導入した農牧地帯となっていた。水城、土城、石城は、中国大陸南北の多様な環境と多元的な新石器文化を象徴している。中原王朝とは、そうした華北・華中の多元的な諸地域を広く巻き込んで再編成された地域間関係の「中心」として登場した

16 やや古い議論となるが西江清高〔2003〕を参照のこと。中原地区の新石器時代後期では、華北的な雑穀（アワ・キビ）農耕を基礎に長江中流域から北上した稲作を一定程度受容し、また遅くとも前二千年紀初葉までにはダイズや、ユーラシア西方由来のコムギなども導入されていたことが明らかになっている〔方燕明 2019 など〕。近年の古気候研究の精緻化によって前三千年紀後半を中心とした気候変動（完新世中期と後期の境界にあたる4.2ka イベント）については、各種の地球科学的分析において互いに近似する結論が得られておりあらためて注目される〔平林・横山 2020〕〔Kajita・Kawahata ほか 2018〕〔Kajita・Isaji ほか 2023〕〔呉文祥・劉東生 2004〕。単純な環境決定論的な主張に賛成はできないが、環境への適応戦略が新石器社会の基礎にあることを考えると、気候変動に対するモノカルチャー的な社会的脆弱性は強調しておきたい。この時期の社会的動態を総合的に研究した張海論文〔張海 2022〕では、新石器時代後期の地域的社会的な瓦解について、地域における資源の枯渇が精神的支柱の影響力の低下に直結し、社会（「地域文明」）の瓦解につながったと論じているが、環境変動の問題についてとくに議論はない。新石器時代後期の多くの地域で起きた「地域」的社会的な衰退という現象は、新石器時代から初期王朝時代への転換を考える鍵でもあり、多方面の研究者による議論の深まりに期待したい。

ものであった。本章ではまず、新石器時代後期の早期都市として水城、土城、石城を代表するいくつかの遺跡を紹介しておきたい。

1 良渚遺跡群（長江下流域）（前3300年頃～前2300年頃）

良渚遺跡群（浙江省杭州市）は、長江下流域の太湖流域において良渚文化が分布した地域の中心的拠点となった新石器時代後期の「水城」を代表する早期都市遺跡である〔浙江省文物考古研究所 2019〕〔中村・劉斌編 2020〕。良渚文化の影響は太湖流域をこえてさらに遠隔地にも及ぶ。良渚遺跡群では外来系土器である石峽文化（広東省）や樊城堆文化（江西省）由来の土器が出土し、一方で良渚文化由来の土器、石器、玉器が石峽文化や樊城堆文化の遺跡で出土することから、中村慎一は、「江西や広東の在地首長が奴隷やその他の産物を良渚王に献上し、その見返りとして玉器類を入手したのではないか」と述べる〔中村 2022: 7〕。良渚遺跡は、早期都市として（良渚文化の分布に投影された）「地域」の中心であるとともに、その地域をこえた一部遠隔地（江西省や広東省など中国東南部）を巻き込んだ地域間関係の中心でもあったと考えられる。数百年後の中原王朝の王都の登場に先駆けて、新石器時代後期においても自身の「地域」をこえた比較的広域の地域間関係の中心的存在となる都市が生まれていたことになる¹⁷。

良渚遺跡群は浙江省杭州市の西郊に所在し、北、西、南を天目山の支脈に囲まれた杭嘉平原西部にある盆地状地形北部の、東西約10km、南北約5kmの範囲に集中する。この一帯は良渚文化の当時もまた現代においても、自然または人工の水路や湖沼が交錯する水郷地帯となっている。遺跡群の内外には現代でも丘状の小高い地形が多く点在するが、良渚文化の時代には自然の丘あるいは人工的に堆築した土台を、居住地、墓地、祭祀場などとして利用した。良渚文化前段階の崧澤文化期では、山麓付近に小集落が点在するに過ぎなかったこの一帯に、前四千年紀末に突然100カ所をこえる

集落が出現し、良渚文化の早期都市が形成された。良渚文化の早期都市は、在地社会の自然な発展の結果生まれたものではなく、おそらくは移住した外来集団が関係していると推測される〔劉斌 2019a〕。

良渚遺跡群の早期都市の基本的な構成は、前3000年前後の良渚文化の比較的早い段階でほぼ完成したと考えられている。遺跡群の中央部には人工堆築の「莫角山」の土台（東西約630m、南北約450m）があり、土台上部には基壇をともしういわゆる「宮殿」群、およびその周囲に版築された特別な土層で整地された広場（東西約465m、南北320m）がある。また、莫角山を取り囲むように、8基の水城門をもつ大規模な城壁（囲壁）（南北約1,800～1,900m、東西約1,500～1,700m、幅60m前後）が築かれている（図4）。莫角山の土台の東側と南側部分では、穀物倉が火災で倒壊した痕跡と推測される膨大な量の炭化稲粒が出土していて注目されている〔中村 2020: 361–362〕。城壁の内側と外側には環濠が築かれ、環濠をふくめて縦横に走る水路網がめぐらされていた。水路の両側は小高い居住地となっている。城壁の内外や城壁外部の集落間を結ぶ主な交通手段は、水路を利用した水上交通であった。良渚文化の晩期には、人口の増大を背景に、城壁の外側にさらに外郭城が築かれ、「良渚古城」は内外2重の城壁をもつ水郷都市の様相を呈するにいたった。内外の城壁は、防御の機能以上に、おそらく水利システムと居住用地の確保をその目的として建設されたもののようである。

良渚遺跡群西北部の大遮山南麓には塘山の名で知られる東西約5kmの堤防を築き、その西端の谷間には上流部（ハイダム系統）と下流部（ローダム系統）のダム群を建設して、全体として大規模な多目的の水利システムを構築していた〔王寧遠ほか 2020〕〔浙江省文物考古研究所・山東大学考古学と博物館学系 2021〕（図5）。

良渚社会の貴族エリート層の墓地が遺跡群範囲の何カ所かで発見されている。最高水準の玉器類を出土した反山（莫角山西隣の高台）のほか、瑶山、匯觀山な

17 本稿で新石器時代あるいは初期王朝時代の「地域」と言うとき、それは比較的等質な自然環境を背景に、比較的等質な考古学文化（土器の様式的なまとまり）が育まれてきた地理的単位を念頭においたものである。そうした「地域」は生活様式・情報などを共有する人びとの地理的なまとまりとも相関しており、新石器時代後期に生成された政治的なまとまり（政体）の単位も、基本的にはこのような「地域」の単位に対応していると想定される。一方本稿では、「圏」という言葉も使用するが、これは主に「地域」をこえた文化要素の拡散や、「地域」をこえて行き交う政治的影響などが見られる地理的な広がりを念頭においた言葉で、分布圏、影響圏、関係圏、政治圏などの表現をもちいることがある。これらの用語については、今後の研究のなかでより正確なものに修正する必要も出てこよう。なお本稿ではそのほかに、現代の一般的な地理用語としての中原地区、西北地区など「地区」という言葉も使用する。

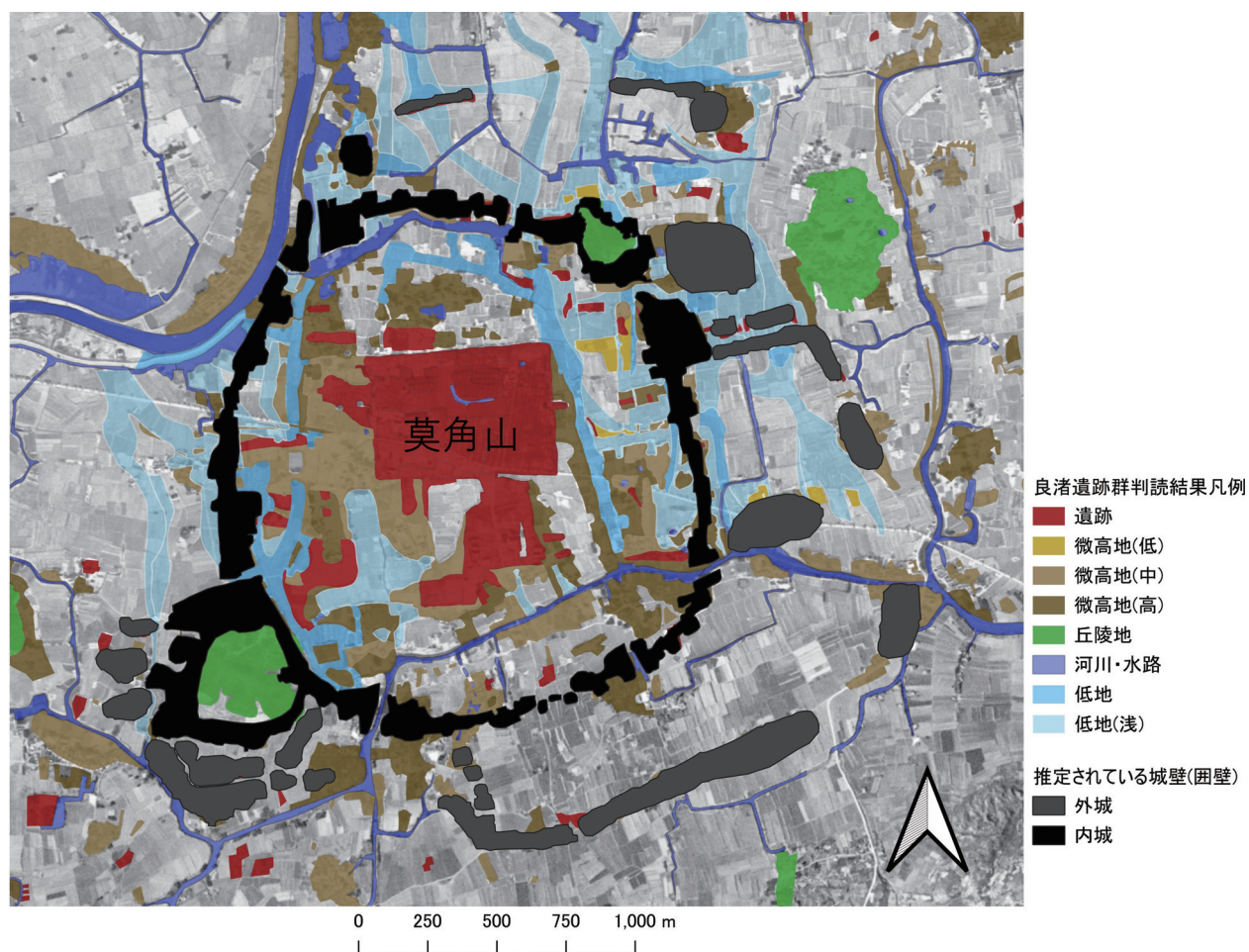


図4 良渚遺跡群「良渚古城」の内外城壁と莫角山

[Watanabe ほか 2017: 47] [劉斌ほか 2019: 137] および CORONA 衛星画像より作図

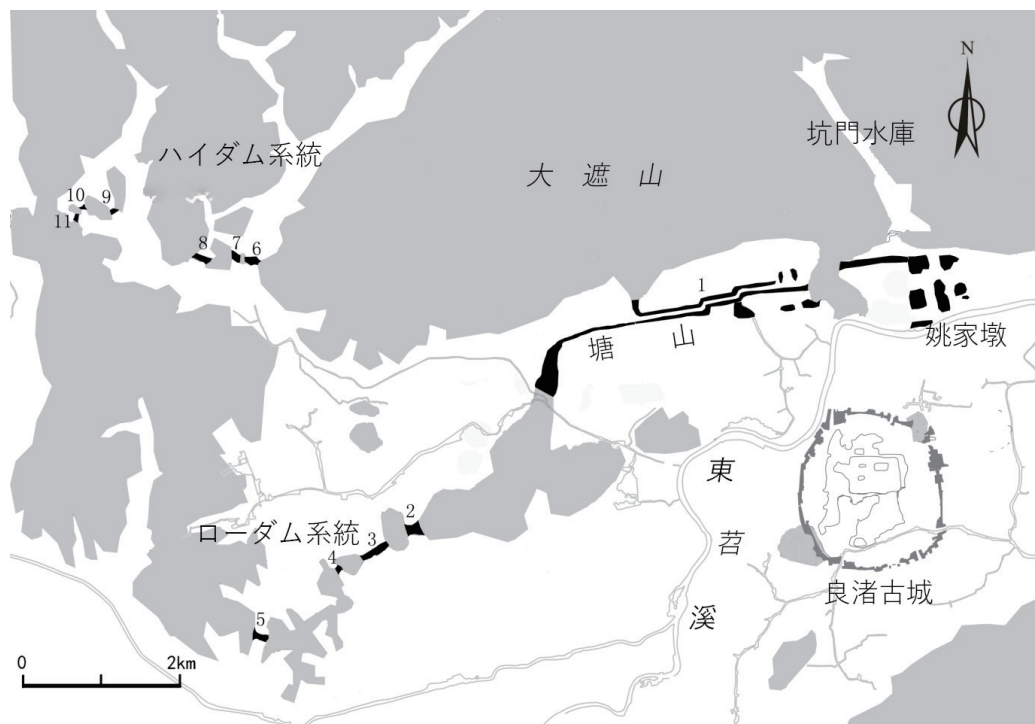


図5 良渚遺跡群 西部・北部の水利システム

[浙江省文物考古研究所ほか 2021: 4] より一部改編

どがそれで、良渚社会最上層の被葬者の墓地であると推定されている。瑤山と匯観山は台地を利用した方形の大型祭祀基壇として建設され、祭壇上に貴族墓地が造営された遺跡である。反山の墓地はときに「良渚王」の墓と呼ばれることもあるが、一つの大型墓を中心とした家族的な墓地のようでもあり、複数世代の「王」を埋葬した王陵区という性格のものではない。その東隣りの莫角山の土台上に築かれた大きな広場は、おそらく大規模な祭祀空間となっていたことであろう[劉斌ほか 2019: 159]。莫角山、瑤山、匯観山は、自然ないし人工の台地上にあるが、その中央部を囲む牆垣はなく、周囲に対して開かれた祭祀空間となっていた。良渚社会は、その発達した玉器とそこに刻まれた完成度の高い神的存在の図像群、および推定される玉器の分配システムなどを通じて、宗教的な求心力を背景とした権力の形成が指摘されている。

良渚遺跡群早期都市の終末のようすについては諸説あり未解明である。ただ都市終末期のある時点で、この一帯は大規模な水害に直面しており、良渚遺跡群の広い範囲で厚さ1mをこえる洪水堆積層が検出されている[劉斌 2019b]¹⁸。前2300年頃までに良渚文化は衰退し、良渚文化の早期都市は放棄された。良渚遺跡群は、新石器時代後期に現れた早期都市のどこにも先駆けて繁栄したが、どこよりも早い時期に衰退した早期都市となった。新石器時代後期後半に隆盛したその他地域の早期都市は、良渚遺跡群の早期都市が衰退するのと、ほぼ入れかわるようにそれぞれの盛期をむかえている。

2 石家河遺跡群（長江中流域）（盛期は前2500年頃～前2200年頃）

石家河遺跡群（湖北省天門市）（図6）は、長江中流域、江漢平原北部の低丘陵地帯の縁辺部にあつて湖沼地帯にも近い[中国社会科学院考古研究所編著 2010][湖北省文物考古研究所ほか 2017][湖北省文物考古研究所編 2019][孟華平 2019]。新石器時代後期の屈家嶺—石家河文化（江漢平原を中心とする）における最大規模の集落群（約8km²範囲）で、集落群から構成された一つの早期都市であった。石家河遺跡群は、城壁（堆築された土城壁）と環濠からなる「石家河古城」を中核部として、その内外40カ所を越える大小の集落が至近距離に点在する[湖北省文物考古研究所ほか 2017]。屈家嶺—石家河文化に属する城壁・環濠をそなえた拠点集落は、江漢平原とその近隣でこれまでに17カ所発見されている[劉輝 2019]。集落の規模には大小の格差があり、そこには階層的秩序が指摘できるかもしれない[中村 1997]。ただし、拠点集落間に具体的にどのような相互関係があったのかは明確ではなく、屈家嶺文化期の段階では政治的な盟主関係や同盟関係は示されていないとする意見も

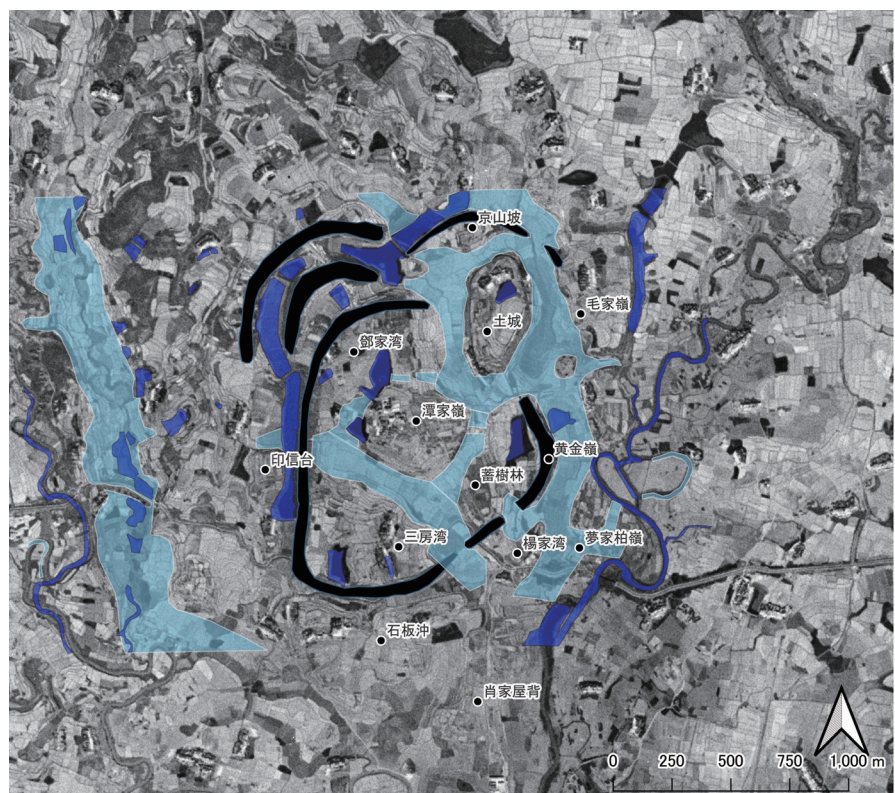


図6 石家河遺跡群 城壁と環濠

[湖北省文物考古研究所ほか 2017: 32] および CORONA 衛星画像より作図

¹⁸ 水害の年代と良渚社会の最終的な衰退との年代関係はなお明確ではない[秦嶺 2019]。

ある [宮本 2020: 188–195]¹⁹。

遺跡群中心部の石家河古城は、南北約1,200m、東西約1,100mの長方形に近い城壁と、その外側の幅約100mにもおよぶ大きな環濠から構成されている。この城壁と環濠の北側外にはさらに、円弧状の構造物が石家河古城の外郭城壁の一部のように築かれている。石家河の早期都市の城壁と環濠は、軍事的な防御というよりも、水害への備え、および農耕や水運をふくめた水利システムの一部という側面が強かったと考えられる。宮本一夫が指摘するように、大きな労働力を必要とした城壁の建設は、近隣集団が参集して、宗教的行為としての協業によって進められた可能性がある [宮本 2020: 188–195]。それを暗示するように石家河古城ではきわめて大規模な宗教的活動が繰り返された痕跡が見つかっている。

石家河古城中央部の譚家嶺には、屈家嶺文化以前からすでに方形の城壁（東西約440m、南北約390m）が築かれていたが、屈家嶺文化（前3100年頃～前2500年頃）晩期には廃棄され、つづく石家河古城盛期の石家河文化期（前2500年頃～前2200頃）には、あらためて建築群が築かれて石家河古城の一つの居住地点となっていた。しかしながら、「宮殿」に該当する顕著な建築物は石家河古城全体でも確認されておらず、また、顕著な大型墓も発見されていない。突出した権力の存在が見えないことは、石家河遺跡群の早期都市の重要な性格である。

石家河古城内西南部の三房湾では、粗製土器の小型紅陶杯が大量に堆積していた。何らかの儀礼ないし飲酒をともなうある種の饗宴に関わった痕跡であろうか。その数量は数万ないし数十万個、あるいはそれ以上とも推定されている。同地点では陶窯も発見されていて、紅陶杯を大量に焼成し、大量に投棄した場所と推測される。また石家河古城内西北部の鄧家湾では、祭壇遺構と祭祀に関連する陶筒形器や紅陶缸などの特殊な土器のほか、動物や人物をかたどった小型の土製塑像（陶塑）が多数の灰坑（土坑）からそれぞれ何千個と出土している。石家河古城西側外の印信台（頂部約110×130mの土台）遺跡でも紅陶缸や大量の紅陶杯が出土し、ある時期この土台上でも祭祀活動が繰り返

返されたことが知られている。祭祀にともなう特殊な大型土器の陶筒形器や紅陶缸は、石家河遺跡群以外の屈家嶺—石家河文化の集落では出土しない。また日用の土器とは言えない紅陶杯や陶塑などは、石家河遺跡群以外の遺跡でも出土することはあるが、石家河の早期都市において夥しい数が生産され、同地の祭祀活動で集中的に消費されたと考えられる。長期にわたり石家河の早期都市において、周囲の集落のみならず、屈家嶺—石家河文化が分布した江漢平原の各地から人びとが参集して、大規模な祭祀が繰り返されたものと考えられる。あるいはその祭祀活動の一つの目的として、参集した人びとの協業により城壁その他都市構造物の建設がおこなわれたのではないだろうか。

石家河遺跡群の早期都市は、その東西を流れる東河、西河および山前の水源に囲まれた環境と、点在する自然の台地を利用して建設されている。石家河古城の内外には、良渚遺跡群の早期都市にも似て自然河川と人工の水路や環濠による水利システムが構築されていた。水運と関係する船着場や橋梁とされる遺構も発見されている。豊かな水資源の環境に適應して、水稻耕作をおもな生業とする人びとが建設した早期都市であった²⁰。城壁、環濠と水利システムは、防御、水害対策、水運、水稻耕作など多目的に利用され、長江中流域の「水城」の特色あるすがたを浮かび上がらせている。

早期都市としての石家河古城は、石家河文化につづく後石家河文化（前2200年頃～前2000年前後）の時期に廃棄された。外来文化の影響をうけて大きく変貌した後石家河文化では、石家河古城の場所を中心に独自の玉器文化を発達させた。その玉器類は、長江中流域のほか、北方に拡散して華北の河南省、山西省、陝西省北部にまで波及している。広域を巻き込んだ地域間の交流がうかがわれるが、それは良渚の早期都市で指摘されているような、ある種の政治性を帯びた地域間関係とは異なる状況のようである。

3 石峁遺跡（西北地区黄土高原）（前2300年頃～前1800年頃）

石峁遺跡（陝西省神木市）は、陝西省北部の黄土高

¹⁹ 屈家嶺—石家河文化も後半の時期（石家河文化期）になると、宗教関連の遺物（紅陶杯、陶塑など）や遺構群が、石家河遺跡群に顕著に集中する状況が見られる。また玉器などの高度な文物は石家河において集中的に制作され、石家河を発信地として遠隔地（華北）へもたらされたことも指摘されている。石家河を中心として地域的社会的統合が進んでいたように思われる。

²⁰ なお、2022年の石家河遺跡の調査では、新たに石家河古城の環濠を取り巻く外郭城が発見され、さらに北部の低山山麓から石家河古城内に水を引き込んだ大規模な水利システムが確認されたという学術報道もあり、正式な報告が待たれる。

原に特有の台地地形（「梁峁」）上に築かれた大規模な積石城壁をもつ早期都市の遺跡である〔孫周勇ほか 2020b〕（図7）。龍山文化期に隆盛し、二里頭文化出現の頃までつづいた黄土高原最大規模の「石城」であった。20世紀前半以来、当地で出土した玉器類が世界各地に流散して早くから著名な遺跡となっていたが、2011年に始まる考古学調査で、積石による内城壁、外城壁のほか、内城中央部の積石「護牆」で四周を覆った「皇城台」（現地の人たちの呼称）（図8）と呼ばれる土台遺跡が調査されて大きな注目を集めた。

前三千年紀から前二千年紀初葉にかけての龍山文化期に、黄土高原地帯で多数建設された石城は、400万m²をこえる石峁遺跡を突出した存在として、数十万m²から百万m²規模の大型のものから、数千m²程度の小型の石城まで知られ〔陝西省考古研究院史前考古研究室 2018: 33〕、その数は少なくとも200カ所をこえる〔馬明志 2019: 31〕。また城壁をもたない大小の集落も同時期に多数存在していた。集落面積の格差からみて集落間に階層的な秩序があったことも推定される。こうした大小の石城をふくむ龍山文化期の黄土高原地帯の集落群のなかで、石峁遺跡は地域的社会的中心の拠点としての早期都市にふさわしい規模と特別の性格をそなえた存在であった。石峁遺跡の土器様式からとらえられる考古学文化は、近年の研究では石峁文化の名前で呼ばれている〔邵晶 2019〕〔孫周勇ほか 2020a〕。石峁文化の分布範囲は、陝西省北部、内蒙古東南部、山西省中北部など、南流する黄河の東西兩岸の黄土高原を中心とした広義のオルドス地方に広がる²¹。石峁文化の地理的範囲に投影されたまとまりある一つの「地域」的社會を想定するならば、その中心の拠点として登場したのが石峁遺跡の早期都市であった。

400万m²をこえる外城（外郭城）と内城の範囲内には居住地点や墓地が点在しているが、起伏の多い城壁内の地形に沿うように居住地点が分散する状況となっている。城内でもっとも標高の高い場所は皇城台であるが、そこから西側崖下の河川まで比高差は100mをこえる。現代の集落はその河川沿いに見られる。多くの大小の石城がそうであるように、石峁遺跡の早期都

市は黄土高原に特徴的な台地地形上に建設されている。周囲の傾斜地は大小無数の浸食による溝壑に刻まれ、乾燥地帯ではあるが小さな水源は分散分布している。なによりも黄河下流域に代表される華北の沖積平野のような洪水の危険性がない、安定した土地であった。傾斜地でも耕作が可能な雑穀天水農耕が定着していた黄土高原の新石器時代には、石峁の早期都市が登場する前2300年頃から牧畜の家畜であるヒツジ、ヤギ、ウマが急速に増加したことが分かっている。ユーラシア草原地帯からの伝播によるものである〔菊地 2022〕〔胡松梅ほか 2022: 25-27〕。黄土高原地帯では当時、単位面積当たりの収穫量は少ないながらも、安定した天水農耕がおこなわれ、それにくわえて牧畜を導入し、これらを背景に比較的大きな人口を擁していたことが推定される²²。

内城、外城、皇城台の積石城壁は、起伏にとんだ自然地形に対応して各種の工法で建造され、各所に城門、瓮城、墩台、馬面、角樓などと呼ばれる防御に関連した建築要素が組み込まれていた。石峁の早期都市の防御への高い意識がうかがわれる。皇城台はその四周を積石の護牆で囲んだ底部24万m²、頂部8万m²の方形の土台となっている。その土台頂部の東半分に、「大台基」と呼ばれるさらに5mばかり高くなった1.6万m²の方形土台が構築されていた〔陝西省考古研究院・榆林市文物考古勘探工作隊ほか 2020〕。大台基の土台の周囲もまた積石による護牆を築いている。皇城台ではこれまでに大量の骨製品とその加工具、小型の銅器と石范などの手工業関連の遺物のほか、「宮殿」建築を示唆する中国早期の瓦などが出土している。石峁の早期都市を頂点とした集落の階層的秩序、防御へ高い意識、手工業の集中、宮殿建築の存在などは、政治面、経済面における石峁早期都市の地域的社会的中心の拠点としての性格を示している。

注目されるのは大台基の周囲で多数の石彫群が発見されたことである〔孫周勇・邵晶 2020〕（図9）。石彫はこれまでに70点以上が発見されている。その多くが大台基南護牆の積石の一部として発見されたほか、周囲の路面などに屹立させて設置した立柱式の円柱形石彫も2点発見されている。彫刻された図像には、

21 石峁文化は、その東南側で陶寺文化、西側で齐家文化、東北側で夏家店下層文化などと隣接しており、それぞれと影響関係があった。

22 陝西省北部では近年、考古学の表面調査が詳細に進められており、従来考えられていた状況をこえてかなり稠密な新石器時代遺跡の分布が確認されつつある。黄土高原の古環境や人口動態に関する新知見が期待される。

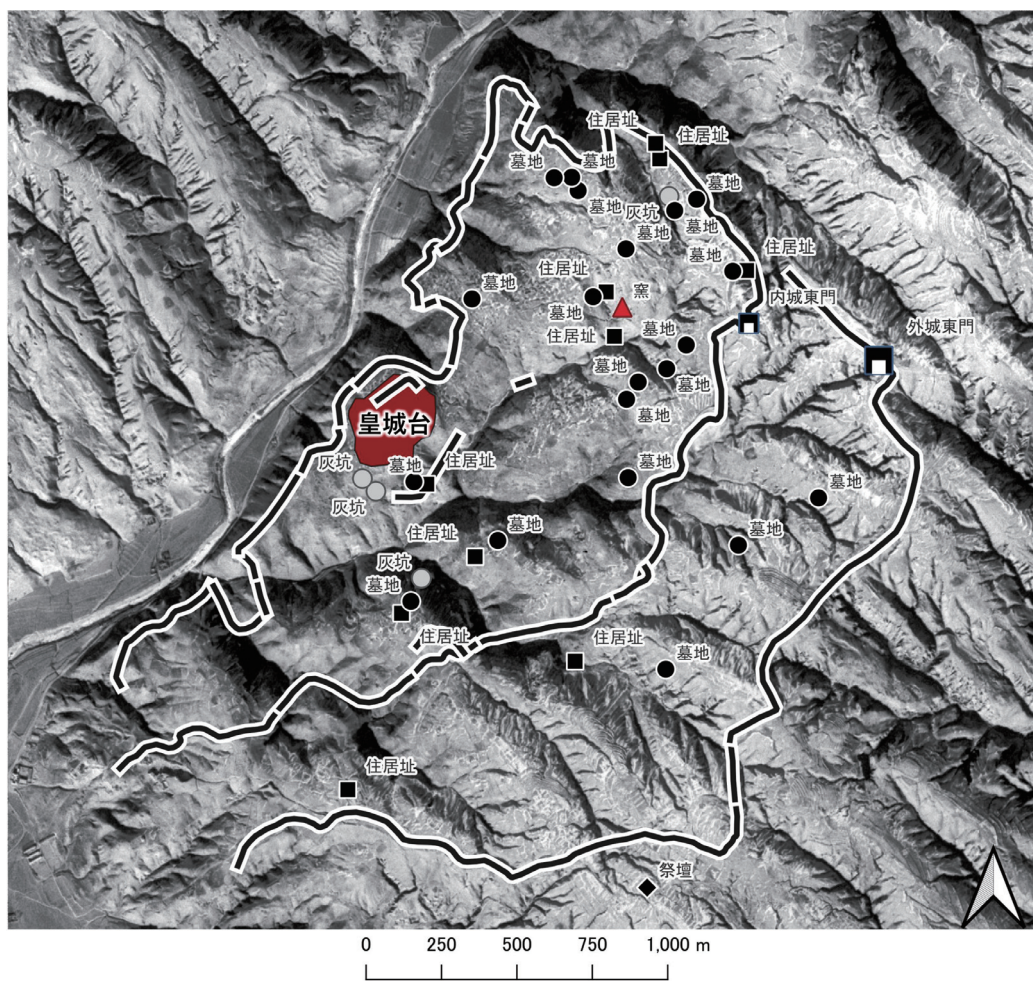


図7 石峁遺跡

〔孫周勇ほか 2020b: 41〕 および CORONA 衛星画像より作図



図8 皇城台の東護牆

渡部展也氏撮影（2024年11月）



図9 皇城台大台基の石彫群

左：[陝西省考古研究院・榆林市文物考古勘探工作队ほか 2020: 41] 右：[孫周勇ほか 2022: 図8]

人物や動物の表現もあるが、多くは神面とも称される神的存在を表現したものとされる。皇城台とその頂部の大台基は、高大な城壁や城門、神面の石彫群などが来訪者を圧倒して迎える公共的空間として企図されたものである²³。その威容は良渚遺跡群の莫角山にも似た存在感を示している。大台基は宮殿建築と関係すると発掘担当者は説明するが、神的図像の石彫群など、ある種の神殿的な性格をもつ建造物であったと考えられ、石峁の早期都市がもつ宗教センターとしての側面を物語っている。

4 陶寺遺跡（黄河中流域）（前2300年頃～前1900年頃）

陶寺遺跡（山西省襄汾県）（図10）は、黄河支流の汾河の東岸、搭兒山西側の臨汾盆地の黄土塬（黄土台地）に所在する。龍山文化期の黄河流域を代表する大規模な「土城」であり、地域的社会的中心としての早期都市遺跡であった[解希恭 2007][中国社会科学院考古研究所編著 2010][中国社会科学院考古研究所・山西省臨汾市文物局 2015]。臨汾盆地一帯は堯、舜の伝説の土地であり、西周時代以降は晋国の中心地ともなった。陶寺文化は臨汾盆地を中心に、黄河北側（中条山北麓以北）の山西省南部の比較的狭い範囲に分布する[中国社会科学院考古研究所編著 2010: 561–576]。二里頭文化を生成した黄河南側の龍山文化とは別系統の発展経過をたどった新石器時代後期の文化であった。臨汾盆地一帯ではこれまでに100カ所以上の陶寺文化の集落遺跡が発見されているが、集落規模が

らみて最大規模の陶寺の早期都市を頂点とした集落間の何らかの階層的な秩序が推測されている[許宏 2017: 106]。

陶寺の早期都市は、早期（前2300～前2100年頃）、中期（前2100～前2000年頃）、晩期（前2000～前1900年頃）で大きく変化した。早期では牆垣をもつ「宮城」（宮殿区）が建設され、中期では大規模な外郭城が建設された。中期から晩期にかけて陶寺の早期都市は暴力的な破壊を受けており、多くの建造物が廃棄され、また従来の支配層も排除されてそれまでの都市の秩序は崩れたと考えられている[何驚 2022][牛世山・楊靖雅 2019]。ただし、晩期においても一般住民の居住は継続していたようで、短い期間とはいえかなり大きな人口を抱えていたともされる。前二千年紀前半に中原地区の黄河以南で二里頭文化（夏王朝）が台頭するより前に、中原地区の黄河以北で栄えた陶寺文化は衰退し、陶寺の早期都市は廃棄される経緯をたどった。

陶寺の早期都市の最盛期である中期の遺跡は、隅丸方形の東西約1,800m、南北約1,500mの外郭城をそなえていた（西側城壁は未確認）（図10）。推定される外郭城の範囲は300万m²をこえる。陶寺遺跡の早期段階から継続した宮城（宮殿区）は、外郭城内の東北部にあり、東西約470m、南北約270mの城壁（基層部分のみ残存）で囲まれ、その範囲は約13万m²あった。宮城内には大型の建築址のほか、当時まだ希少な早期の銅器片などが発見されており、都市の中核的空間であったことがうかがわれる。宮城の外側、外郭城の内側には一般住民の居住地や、石器・土器などの工房址

²³ 良渚文化や石家河文化の玉器に見られる神的図像、あるいは初期王朝時代の青銅器の獣面文様などは、「持ち運び」を前提とした宝器や儀器に表現された図像であったが、石峁の石彫は神殿ともいえるべき宗教的な公共の空間に設置されて威容を示す存在であった[陳小三 2022]。

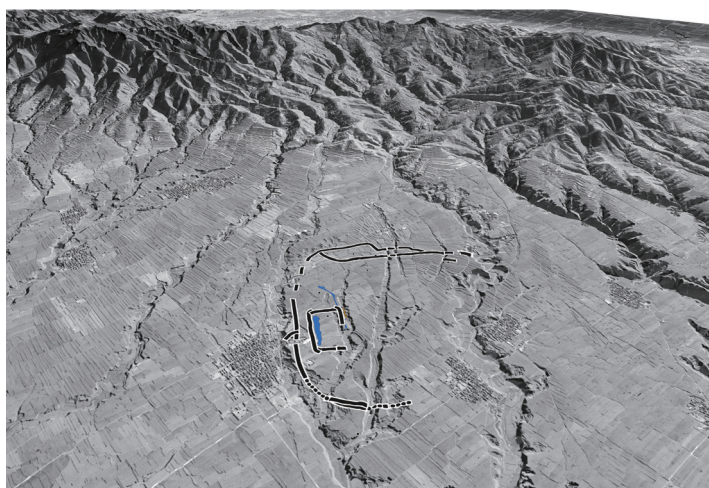
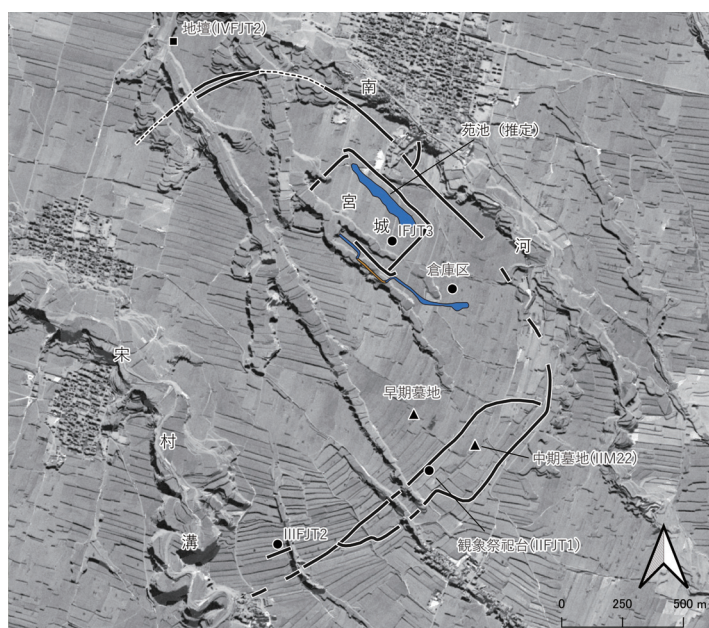


図10 陶寺遺跡

〔何驚 2019: 92〕および CORONA 衛星画像より作図

も確認されているが、都市全体の構成は明確ではなく、手工業生産の詳細もわかっていない。宮城外側の西南部と、外郭城南部に付設された小城内からは大型墓(王墓と呼ぶ研究者もある)と中小型墓からなる共同墓地が発見されている。また外郭城内では道路址が検出されているほか、宮城内では排水渠と苑池(貯水池)と思われる水系システムの一部が発見されるなど〔何驚 2019: 93-94〕、計画都市的な性格の萌芽もうかがわれる。

陶寺遺跡の共同墓地では、墓壙の規模と副葬品の明確な格差から、陶寺社会の階層化が顕著である一方、最高位の墓も、中位、下位の墓と一つの共同墓地を構

成していることから、当時隔絶した「王」の墓は現れていないとする解釈が一般的である〔岡村 2008: 43-45〕。このような階層性をもなう一つの共同墓地は、血縁的紐帯を背景とした族的集団の墓地と考えられる。のちの初期王朝時代では王墓が族的集団から分離、隔絶するなど、様相がおおきく変化するが、大小さまざまな族的集団(氏族的集団、家族的集団など、さまざまな血縁的紐帯にもとづく集団)が都市内の居住地と墓地の基本単位となる状況は、後述する中原王朝の王都へとつながっている。

外郭城外側の西北部では、面積約1,400m²の方形祭壇址(「地壇」)が発見されている〔何驚 2019: 98〕²⁴。また外郭城南部の小城内では、面積1,700m²余りの推定天文台(「観象台」)の半円形基壇をふくむ祭祀遺構が発見されている〔中国社会科学院考古研究所山西工作隊ほか 2004〕。これら外郭城周辺の2カ所の施設は、都市の中軸線上に並ぶようにその西北部と東南部に配置され、地と天の祭祀にかかわる場所であったとも考えられる。陶寺の祭祀施設は、良渚、石家河、石峁の早期都市に見られたような、都市中央部に大規模で顕著な祭祀空間を演出するものではなかったが、一方で、後述する初期王朝時代の王都のように、外部に対して閉じた祭祀空間(朝廷儀礼などの空間)を構成するものでもない。基本的には外に開かれた公共的な祭祀空間と

いう性格をもっていたように思われる。

陶寺の早期都市では、早期の銅器、天文台遺構、度量衡関連の文物、断片的な文字(陶文)、「礼制」につながる楽器(石磬など)〔宮本 2020: 323-325〕、玉器、「龍」を描いた彩絵陶、彩絵漆木器などが出土していて、当時の先端的な科学技術と管理された手工業の存在をうかがわせる。同時にまた、のちの時代の中国固有の「礼制」思想への萌芽を指摘することができる。

IV 中原王朝の王都

歴史時代の中国の伝統的な都市は、一般的に版築に

²⁴ 発掘担当の何驚は、この遺構を「地壇」すなわち「社壇」と述べる。

よる方形プランの城壁に囲まれ、中軸と方位を意識した計画的な都市であった。考古学は、都市を囲む城壁（外郭城）、宮殿・宗廟区を囲む城壁（内城あるいは内城内の宮城）の規模と構造から都市計画の概容を見きわめ、道路網、水系システム、各種建築、手工業、市場などを総合して都市の全体像をとらえようとしてきた。なかでも城壁は、中国の伝統的都市の基本骨格をつくる重要要素とみなされてきた²⁵。城壁を築いた集落は新石器時代の前四千年紀に黄河流域、長江流域ですでに出現していた。ところが、初期王朝時代の王都遺跡では、大規模城壁をもつ王都遺跡（殷王朝前期、中期）がある一方で、長年の調査を経ても城壁が発見されない都市遺跡が少なくない。中国社会科学院考古研究所の許宏は、中国古代都市の考古学研究を総括するなかで、初期王朝時代の都市について、「大都無城」の表現をもちいて、都市を

囲む城壁の存在は初期王朝時代の都市の条件とはならないことを論じている〔許宏 2016b〕。筆者もその通りではないかと考える。後述するように最近になって西周時代の周原遺跡で内城壁、外城壁が新発見された例もあるが、基本的に許宏の見解は妥当なものと考えられる。初期王朝時代において、城壁は都市を構成する根本要素ではなかったが、宮殿・宗廟区、祭祀区、手工業区、道路網、水系システムなどに関連する初期王朝時代に整備された諸要素は、のちの歴史時代中国の伝統的な都市へと受け継がれていく。

1 二里頭遺跡（夏王朝の王都）（前1700年頃～前1500年頃）

二里頭遺跡（河南省偃師市）（図11）は、北側の邙

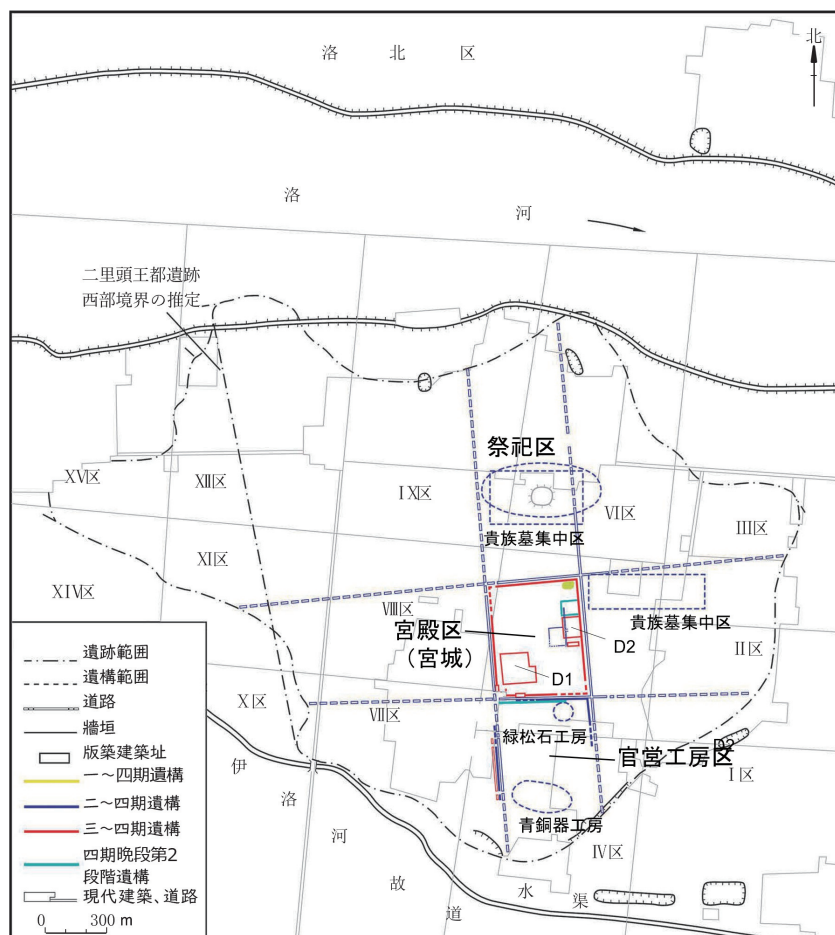


図11 二里頭遺跡

〔趙海濤 2020: 110〕より一部改編

山台地、南側の嵩山に挟まれた東西約150km、南北約16～30kmの洛陽盆地の中央部、古伊洛河（黄河の支流）北岸の台地上に所在する〔中国社会科学院考古研究所 1999、2014a〕〔許宏 2009〕〔飯島 2012〕〔趙海濤 2020、2023〕。二里頭の都市は、前1700年頃までに、それまで顕著な集落は一切なかった洛陽盆地中央部の土地に、突然人口が集中して100万m²をこえる大集落（または集落群）が出現してはじまる。これが成立後間もない二里頭文化（第一期）の拠点集落であった。洛陽盆地南側の嵩山以南では、新石器時代後期において城壁や環濠を築いた拠点集落が相ついで登場し、短い期間で興亡したが、二里頭の拠点集落が成立する頃にはそのすべてが衰微していた（42頁、表1）。二里頭の拠点集落が登場したとき、ここは中原地区

²⁵ 中国古代都市の代表的研究者の一人である劉慶柱は、中国の「都城」（都市）について、社会発展の過程で誕生した政治的産物であり、国家と都城は同時に誕生したと考えている。そのうえで、城壁は都城の基本的な政治要素なのであり、したがって城壁のない都城は実際上存在しないとする。二里頭遺跡や殷墟遺跡など一部の初期王朝時代の王都遺跡では、あるべき城壁がなお未発見とする考え方を述べている〔劉慶柱 2006: 53〕。中国の古代において国家と都市の同時的成立という見方について本稿も同じ意見であるが、都市を囲む城壁を都市の欠かせない大前提とすることに、本稿は違う意見をもっている。

唯一の中心的拠点であり、その出現の過程で黄河以南の中原地区の統合も進んでいったと考えられる。二里頭文化二期以降、二里頭文化はさらに黄河本流以北をふくむ中原地区の全域へと拡張した。この過程で二里頭文化の政体は、華北・華中の広域を巻き込んだ新たな地域間関係の「中心」となり、最初の中原王朝としての政体を形成したと思われる。その政体の中心にあった二里頭の拠点集落は、中原王朝の王都・首都へと成長したのである。二里頭の王都が成立した時期には、中原地区のみならず、華北・華中の新石器時代後期の早期都市は基本的にすべて衰退あるいは廃棄されており、華北・華中唯一の大規模都市となっていた²⁶。

二里頭の王都遺跡で二里頭文化層が確認される範囲は東西約2,400m、南北約1,900m、面積約300万m²である。都市を囲む城壁（外郭城）は、半世紀をこえる調査を経ても発見されていない。都市は中央部と周囲の一般活動区に分かれており、中央部の空間は、「井」字形の格子をなす東西2条・南北2条の道路網によって9区に区画されている（図11）。その中央の区画が宮殿・宗廟区（宮城）であり、その北側の区画が祭祀区、南側は官営手工業工房区（青銅器工房、緑松石工房）と考えられている。「井」字形の道路はその両側に沿って版築による牆垣（土城壁）が築かれていた〔趙海濤 2023〕。道路と牆垣による区画は、計画的な都市であったことを示唆しており、また都市内の功能区（後述）の区画、居住者集団間の区画を明確にするための構造であったと考えられる。このような格子状の道路網と牆垣により都市の中軸を明確にした都市づくりは、新石器時代後期の早期都市には見られなかったものであり、歴史時代の中国的な都市の設計思想の先駆けとも言える。

以上のような二里頭の王都の基本骨格は、二里頭文化二期～三期において完成した。二里頭の王都は二里頭文化四期前半まで繁栄したが、四期後半には道路網、

宮殿・宗廟区の牆垣、宮殿・宗廟建築などが破壊され、外来の新住人が一時期登場する。洛陽—鄭州地区（中原地区東部）を舞台にした夏王朝と殷王朝の交代を反映した夏王朝王都の終末と考えられる〔趙海濤 2020: 118〕²⁷。

宮殿・宗廟区内の宮殿・宗廟建築の代表的なものは1970年代に発掘された1号、2号建築址（D1、2）である（図12）。1号建築址は、土塼の回廊に囲まれた方形の建築で、南門から回廊内に入ると広場となっており、広場の奥に一段高い主殿建築がある。2号建築址は1号に類似したひとまわり小型の建築で、主殿の背後には、5.3×4.3mの大型竪穴土坑（M1）があった。この土坑は王墓の可能性もある墓と推測されてきた。近年では王墓とする遺構の性格に否定的な意見もあるが、かつて林巳奈夫が指摘したように〔林 1995: 195–198〕、この土坑と南門とが、建物全体の中軸線から東にずれながらも別の軸線上に並ぶという現象が見られ、土坑の特異な性格を示唆している。王墓あるいは特別な人物の墓であるか、または祖先王の遺品を埋納した土坑などの可能性も考えられる。2号建築は王室が祖先王の祭祀を行う「宗廟」として〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 129〕、参集した人がここで王室の祖先と対面する空間を演出したものと考えておきたい²⁸。牆垣をめぐるせた宮城内にあって土塼と回廊をめぐるせた宮殿・宗廟建築は、外部に対して閉じた空間を構築していたと考えられる。このような空間は歴史時代の中国王朝の宮殿・宗廟建築の源流とみることもできよう。宮殿・宗廟区は王室による政務と宮廷儀礼の空間として、王と貴族あるいは氏族的集団の代表者など限られた人が参集する場であり、新石器時代後期の早期都市に見られたような大規模かつ開かれた祭祀の空間に、多数の人びとが参集したであろう状況とは異なっていた²⁹。なお、宮殿区北側の祭祀区とされる区画には、宮殿区の宗廟などとは異なる種類の祭祀遺構である複数の円形基壇（「壇」）と長方形竪穴

26 ただし、中国西南地区四川省の三星堆遺跡や長江以南の江西省呉城遺跡など（37頁、図1）、新石器時代後期の早期都市的な性格をもつ一部の新興都市が誕生していた。「地域」的社会的中心拠点であり、また宗教センター的な性格がうかがわれる都市である。中原王朝の政治圏、文化圏の外にあって前二千年紀になって遅れて登場した「早期都市」と考えることができる。

27 本稿は夏、殷王朝交代の史実を前提として新旧王都遺跡の興廃関係を考えているが、考古学的に王朝交代前後の文化と社会の動きの細部をとらえようとすると、難しい問題も多い。この時期の土器群の変化を詳しく検討した最近の研究として、大貫静夫〔2021〕、久保田慎二〔2021〕などがある。

28 岡村秀典は1号建築が外朝（王と臣下による宮廷儀礼）、2号建築が内朝（王室行政や儀礼）に分化していると推測し、この時期における宮廷儀礼の出現を考えている〔岡村 2008: 84–87〕。

29 二里頭文化三期以降、宮殿・宗廟区内の居住人口と参集者の限定化を反映するように、宮殿・宗廟区内では井戸など生活関連の遺構が顕著に減少するという指摘がある。

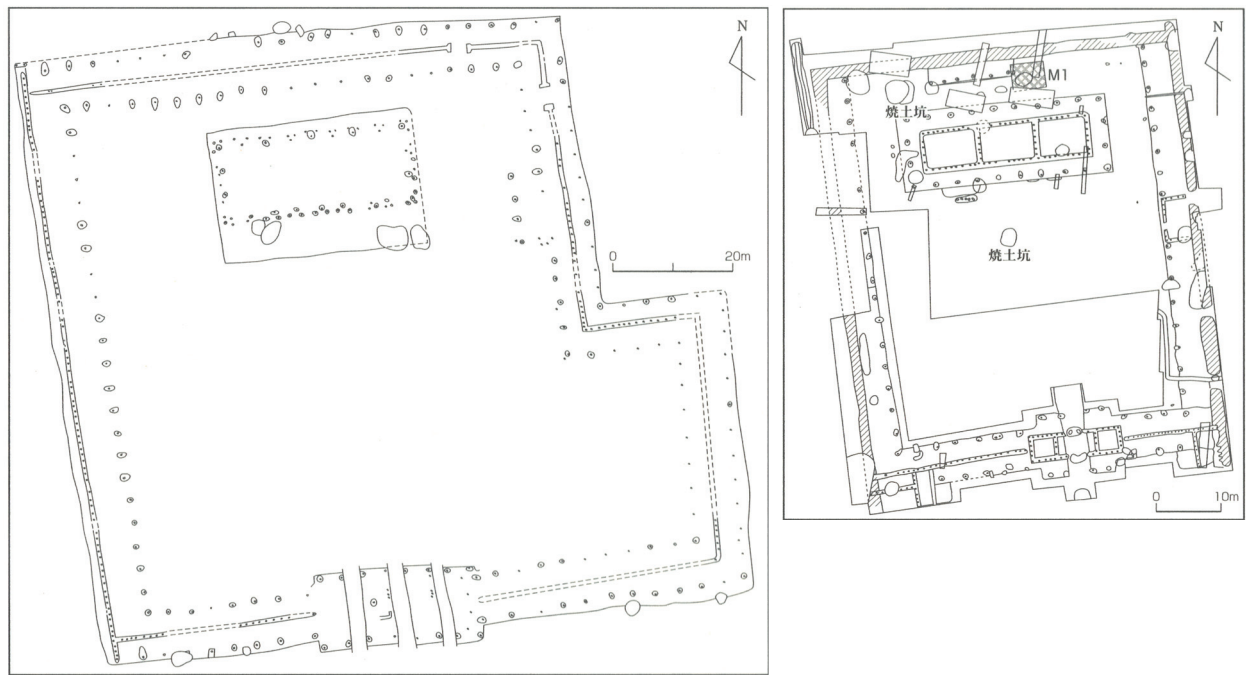


図12 二里頭遺跡の宮殿・宗廟 左：1号宮殿址 (D1) 右：2号宮殿址 (D2)
[西江 2003: 65] より

（「壇」）が200～300mの範囲から発見されている[中国社会科学院考古研究所編著 2003: 129]。屋根のない基壇遺構の構造などから天地の祭祀に関わる遺構群とも推測され、あるいは陶寺遺跡の「地壇」や後述する西周時代の「社祀」などに近い存在である可能性もある。祭祀活動の規模は大きなものではなく、祭祀区自体が周囲を道路と牆垣で区画された閉じた空間となっていたことから、新石器時代後期の早期都市を特徴づけた開かれた大規模な祭祀空間とは異なる。

発掘担当者の趙海涛は、二里頭遺跡中央部の宮殿区と官宮工房区を除くその他の各区画には、それぞれに貴族墓地と貴族居住区が狭い範囲に集中したいわゆる「居葬合一」（後述）の空間が形成されており、その構成員は「同一の家族または集団」であったと推測する。そして類似の現象は殷王朝の王都である偃師商城・鄭州商城・殷墟、西周王朝の王都である周原などにも指摘されるとする[趙海涛 2020: 119][趙海涛 2023: 15-16]。本稿では族的集団（大小の氏族的集団あるいは家族的集団）がその居住地と墓地から構成した集住地を「族邑」と呼ぶことにする。関連する問題を後章で詳しく取り上げる。

2 偃師商城遺跡、鄭州商城遺跡（殷王朝前期の王都）（前1500年頃～前1350年頃）

偃師商城遺跡（河南省偃師市）（図13）は、二里頭

遺跡の東北わずか約6kmに所在し、二里頭遺跡と同じく洛陽盆地中央部の古伊洛河北岸に建設された都市遺跡である[杜金鵬・王学荣主編 2004][中国社会科学院考古研究所編著 2003][中国社会科学院考古研究所 2013]。建設の時期については二里頭王都の廃棄時期との前後関係に検討すべき課題を残してはいるが、夏、殷王朝の交代にともなって、東方の鄭州商城（後述）とほぼ同時期に、中原地区東部に新規に建設された殷王朝の王都であった。夏王朝の王都の近くに建設されたことから、新興の殷王朝が、前王朝の王都所在地一帯を支配下におく意図をもって政治的判断により選地され、建設された王都であることが推測される。なお、同地点には都市建設以前にさかのぼって顕著な集落遺跡は存在せず、ほぼ空白に近い土地に新規に建設された都市ということになる。『漢書』地理志・偃師条の記載との符合から、同遺跡は殷王朝初代の湯王の都「西亳」と考えられている。

偃師商城には二里頭遺跡では見つからない大規模な城壁が発見されている。城壁は大城（外城、外郭城）と小城（内城）からなり、大城は南北が約1,710m、城壁内の面積が約190万m²あり、周囲に水濠をめぐるせていた。内城は南北が約1,100m、面積は約81万m²ある（図13）。偃師商城遺跡の発掘報告では都市が継続した二里岡文化下層早段～上層晩段相当の期間を3時期に区分している。第一期では内城の城壁と宮殿・

宗廟区（宮城）の宮殿群と祭祀建築群、宮殿・宗廟区外西南の倉庫（「府庫」）などが建設された〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 213-214〕。第二期では小城を北側と東側に拡張するように大城（外城）が建設された。また、宮殿・宗廟区内には外部から水を引き

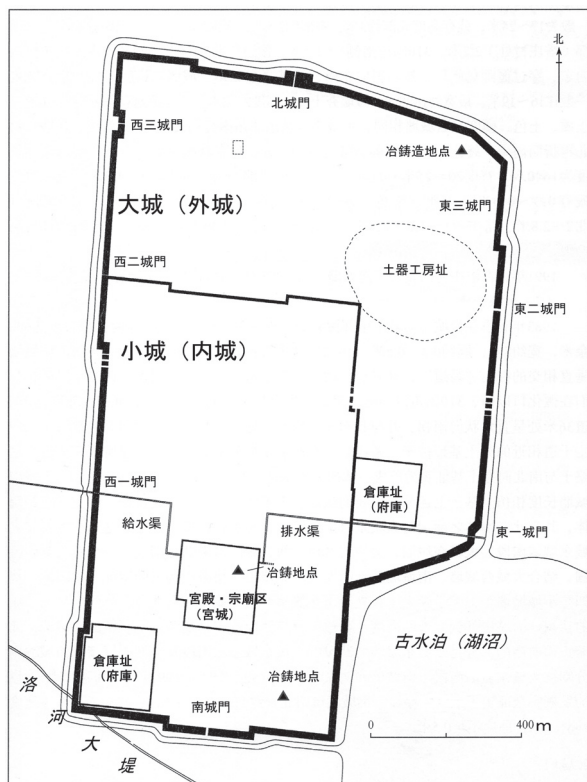


図13 偃師商城遺跡

〔中国社会科学院考古研究所 2013: 11〕および
〔許宏 2017: 173〕より一部改編

入れて造成した苑池（貯水池）や、青銅器鑄造痕が検出されている。内城の東側には倉庫が増設された。第三期は、はじめは都市が継続されたが、三期の中頃以降（二里岡文化上層後半）には廃棄された。この時点は東方の鄭州商城の廃棄時期よりやや早いとされる〔許宏 2017: 176〕。

都市を囲む城壁が建設されたことは、下記する同時期の殷王朝前期の王都・鄭州商城とともに、夏、殷王朝交代前後の緊張した情勢を考えれば、防御の城壁が築かれるのは合理的なことであろう。また二里頭の王都では未発見の倉庫（穀物倉）が、偃師商城では発見されている。一方、偃師商城と二里頭遺跡では共通点も多い。両都市とも牆垣に囲まれて閉じた空間を特徴とする宮殿・宗廟区（宮城）を構成し、その内部に宮殿建築や祭祀建築を配置した。祭祀にかかわる建築は祖先を祀る宗廟とされるもののほか、二里頭遺跡でも指摘された屋根のない、ある種の祭壇（「壇」）建築のような構造物もふくまれる。

鄭州商城遺跡（河南省鄭州市）は、偃師商城の東約110km、現在の鄭州市街地に所在する〔河南省文物考古研究所 2001〕〔中国社会科学院考古研究所編著 2003〕〔許宏 2017: 168-170〕〔劉亦方・楊樹剛ほか 2021〕（図14）。殷王朝前期の二里岡文化の下層期、上層期の王都と考えられ、上記した偃師商城とほぼ同じ時期に相ついで建設された殷王朝の王都であった。つまり殷王朝前期において偃師商城と鄭州商城は、基本的に西と東に並び立つ二つの王都ではなかったかと

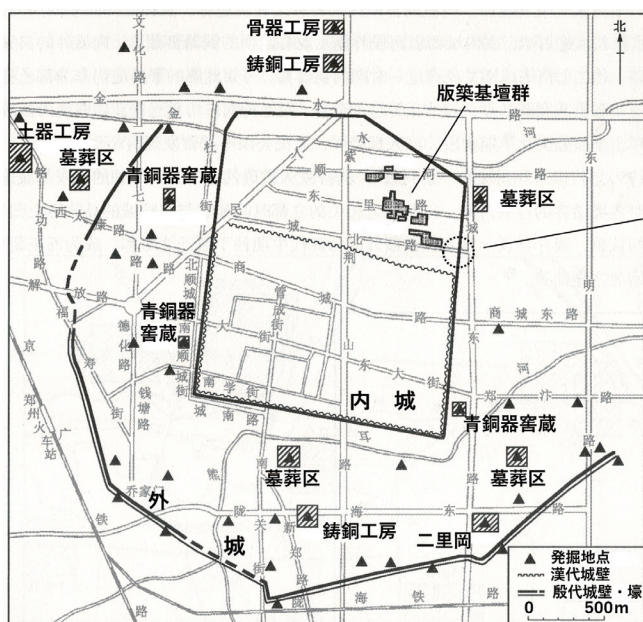


図14 鄭州商城遺跡

左：〔許宏 2017: 169〕より一部改編 右：筆者撮影（1985年）



考えられる。前者は夏王朝の王都の近傍に建設され、後者は殷王朝の主体となる集団が黄河以北より中原地区に南下したときに定着した場所であった可能性が高い。二里頭文化の後期、鄭州市の一带には二里頭文化の集落が点在していたが、拠点的な大型集落は知られていない。その後に殷王朝の主体となる人びとが、外来の集団として黄河以北の太行山脈東側の地方から南下して鄭州一带に定着し、彼らによって王朝交代の前後に政治的意図をもって建設された都市と考えられる。

鄭州商城はその規模が大きいことから、鄭州商城を殷王朝前期の首都、偃師商城を副都とする考え方もある。のちの西周王朝では三つの王都が併存したことが考えられており、初期王朝時代では複数の王都を建設して「畿内的地域」（後述）を構成し、国家の統治にあたるがあったと考えられよう。

鄭州商城遺跡では大規模な内城壁（内城）と外城壁（外城）が発見されている。内城は周長約7km、面積は300万m²に近い。内城内の東北部には大型の建築群や祭祀関連遺構の一部が発見されているが、のちの隋・唐時代以降の都市開発により破壊が進んだ内城の中央部に、かつては鄭州商城の宮殿・宗廟区があったという推定もある〔劉亦方・張東 2021〕。内城外側の東南から西北に連なる長大な外城壁（外城）が発見されている。この外城壁の役割として、都市の近郊における自然河川を利用した水利システムと関係するという見解もある〔劉亦方 2019〕。内城と外城の中間部および外城の外側には、青銅器、骨器、土器などの手工業工房が点在し、また墓地をとまなう小型集落が点在している。後者は先にもふれた「族邑」の単位に相当すると推測される。これら内外城壁に囲まれた王都の中核部だけではなく、その周辺地域をふくめて鄭州商城と同時期の集落遺跡が稠密に分布する範囲は160km²におよぶとされる〔許宏 2017: 168〕。この範囲は、都市の本体（鄭州商城）と、その周囲に点在して首都の機能を補完する種々の役割を担った集落から構成された「都城圏」に相当するように思われる。

3 殷墟遺跡（殷王朝後期の王都）（前1350年頃～1050年頃）

殷墟遺跡（河南省安陽市）（図15）は、19世紀末に

おける甲骨文の発見を発端として、1910年頃までに甲骨文出土地が河南省安陽市の小屯村付近であることが判明し、やがてその地が伝世文献と甲骨文的照合から殷王朝後期の王都であると考えられてきた都市遺跡である〔中国社会科学院考古研究所編著 2003〕〔岳洪彬ほか 2011〕〔唐際根ほか 2016〕〔許宏 2017: 189–196〕〔何毓靈 2018、2021〕。1928～37年に中央研究院歴史語言研究所によって大規模な発掘調査がおこなわれ、小屯村付近の宮殿・宗廟区の建築群や遺跡北部の王陵区が調査された。第二次世界大戦後は中国社会科学院考古研究所によって現在まで発掘調査が続けられている。1999年にはそれまで考えられてきた殷墟遺跡範囲の東北外に隣接して殷王朝中期にさかのぼる都市遺跡の洹北商城が発見された。新発見の洹北商城は殷王朝前期の鄭州商城・偃師商城（二里岡文化）のち、殷王朝後期の殷墟文化（一期～四期）との中間期に建設された殷王朝中期の王都遺跡で、短期間をへて殷墟文化一期の頃に廃棄され、南側に隣接する殷王朝後期の殷墟遺跡へと王都の中心が移行したものと考えられている（図15）。従来からのいわゆる殷墟遺跡と洹北商城を合わせて殷墟遺跡群と呼ぶこともある。

殷墟遺跡は河南省北部の安陽盆地に所在する。盆地の東西は約20km、南北は約10kmで盆地の西部は太行山脈の東麓、東は華北平原へとつながる。遺跡全体の中央部を西から東に洹河が流れ、洹北商城は洹河の北岸に、殷墟遺跡の中心となる小屯村付近の宮殿・宗廟区は洹河の南岸に造営された。また大規模な王陵区が洹河の北側、洹北商城の西方に造営されている。これらをふくめた都市遺跡の面積は約36km²に達する。

洹北商城は全体を方形の「外郭壕溝」で囲み、中央に牆垣で囲んだ宮殿・宗廟区、工房址、貴族と平民の居住区などが発見されている。外郭壕溝とは、都市の外周を囲んだ方形プランの周壕遺構のことで、版築城壁の基層部分ないしは未完成の城壁という見方もあるが、現在までに確認されているのは溝の構造だけである。城壁ではなく周壕として建設された可能性も高いが、そうだとすると都市を囲む大規模な外郭を築くという思考自体は、城壁をもつ偃師商城や鄭州商城に共通するものであろう。洹北商城中央の宮殿・宗廟区はかつて大規模な火災にあったことが確認されており、おそらくそうしたことが原因で、洹北商城はわずか数

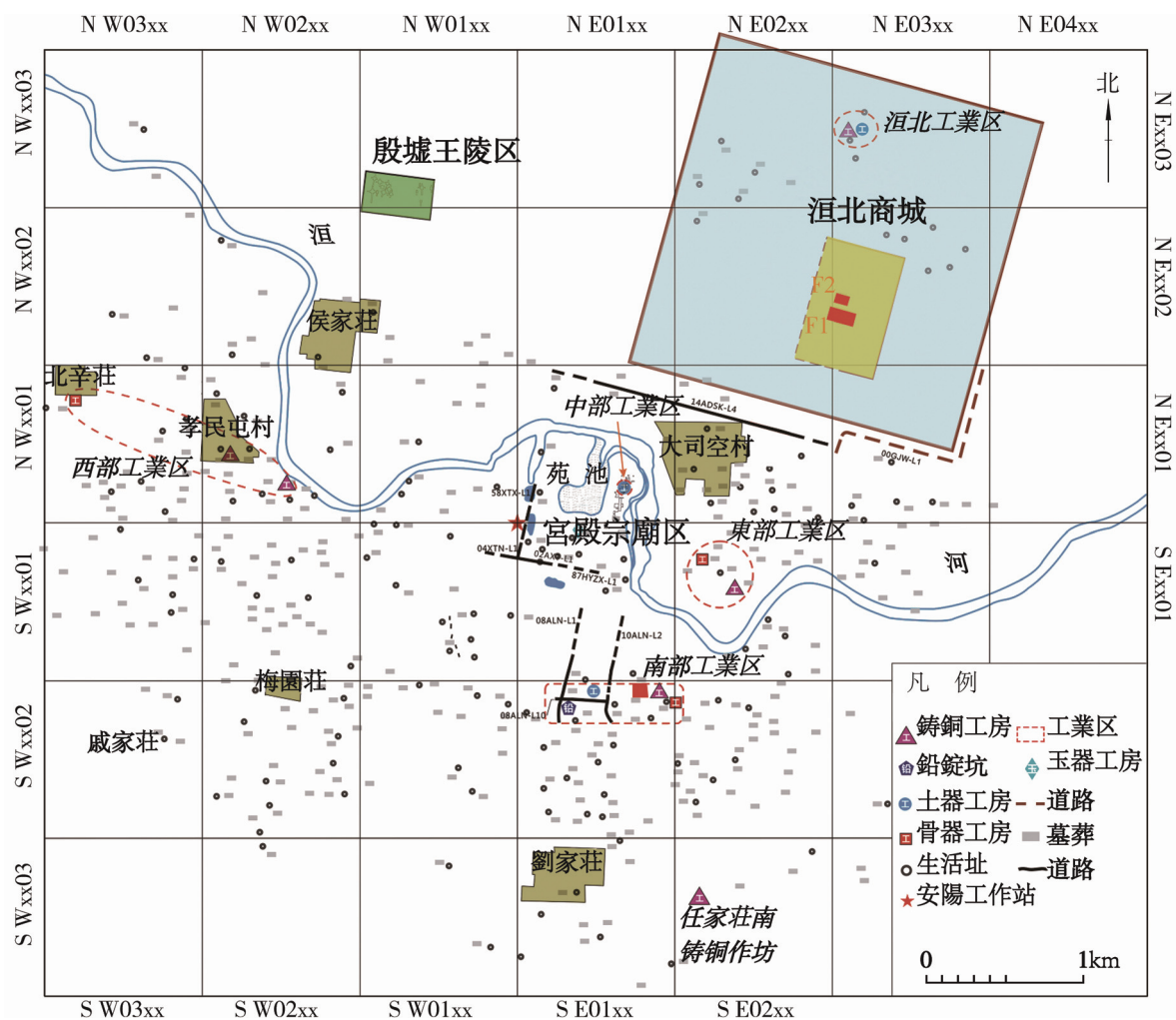


図15 殷墟遺跡（洹北商城をふくむ）

〔何毓靈 2019: 76〕より一部改編

十年で廃棄され、洹河の南岸にあらたな王都の中心部（小屯村付近の宮殿・宗廟区）を建設したのである³⁰。

殷墟遺跡の宮殿・宗廟区は洹河南岸の微高地にあり、面積は約70万m²、その北と東は洹河に囲まれ、西と南は南北約1,100m、東西約650mの周壕（大灰坑）に囲まれた閉じた空間を形成している。ただしこの周壕の建設には厳格な計画性があったとは言えず、主に建築に必要な土取りや苑池（貯水池）と関係する遺構とする指摘がある〔唐際根ほか 2016: 329〕〔何毓靈 2021: 87-88〕。牆垣（宮城の城壁）にあたるものは発見されていない。宮殿・宗廟区では1920～30年代の調査で53基の建築基址が発見され（近年も数基が追加的に発見されている）、甲組、乙組、丙組の三つの

建築群に分類されてきた。建築基址の構造から一般に、乙七、乙八基址などは宗廟、丙三～丙六基址などは祭壇（「壇」）の類の建築と推定されている〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 298〕。宮殿・宗廟建築群の西側に隣接して面積約6万m²の苑池（貯水池）遺跡が発見されている〔何毓靈 2021: 87-88〕。宮殿・宗廟区の建築群内には30条以上の明渠、暗渠がめぐられていて西側の苑池に通じており、苑池はその北部で洹河とつながっている〔何毓靈 2021: 87-89〕。苑池によって都市の景観を創出するとともに給排水の水系システムを構成していたと考えられる。王室祭祀の占トの記録である甲骨文を刻んだ甲骨片の発見は今日まで約16万片にもおよぶが、その多くはこの宮殿・宗廟

³⁰ 松丸道雄は、洹北商城の廃棄後に新たに建設された王都の中心部は、小屯村付近に知られる宮殿・宗廟区ではなく、そこからさらに南約4km離れた今日の安陽市街地にあった可能性を指摘する〔松丸 2024 [上巻]: 297-311〕。松丸によれば、小屯村付近の「宮殿・宗廟」は「王城」の中心ではなく、殷王族により日々おこなわれた太陽崇拝の場であったという。重要な指摘がふくまれる主張であり、今後の調査研究による検証を待ちたい。

区の範囲から出土している。

宮殿・宗廟区にはまた王陵区に埋葬された王以外の一部の王族の墓、王室に近い貴族墓、平民墓とされるものが造営され、「居葬合一」的な状況を生み出していたようである。一方、宮殿・宗廟区の外の広大な遺跡範囲には、異なる大小の族的集団から構成された「族邑」の単位が多数分布していた。各族邑にはしばしば版築建築がとまもない、給排水システムが設けられ、居住区の近くには墓地がつくられた。そこにいわゆる「居葬合一」的な状況が見られると指摘されている³¹。

殷墟の王都では大規模な各種の手工業生産がおこなわれた。発掘担当者の何毓璽は、現代社会の「工業区」の言葉を援用して、殷墟遺跡内に四つの工業区を指摘する〔何毓璽 2019〕(図15)。中部(宮殿・宗廟区内)、南部、西部、東部の各工業区である。それぞれに特徴はあるが、青銅器、玉器、石器、骨器、土器などを生

産する高度な工房が工業区内に集められていた。工房が集中した工業区を設定することは、生産過程の効率化と支配層による生産過程の管理に有効であったと考えられよう。各工業区内にはまた生産従事者の家族的集団の墓地(族墓地)の存在も指摘され、手工業生産に従事する特定の家族あるいは族的集団が、工業区内に小規模な族邑をつくっていた可能性も指摘できる。

殷墟遺跡内の宮殿・宗廟区、多数の族邑、手工業工業区などの各単位は、当時最先端だった馬車も行き交う道路網で結ばれていたと推定される。道路網は水系システムとともに都市の骨格をなすインフラであるが、殷墟について確認されたことは、なお断片的である。殷墟の王都を構成した族邑の単位は、時間とともにその数を増し、また各族邑自身が成長して、その結果都市はしだいに居住地が過密化し、都市の構成も変化したとされる。こうした状況からみて、洹北商城廃

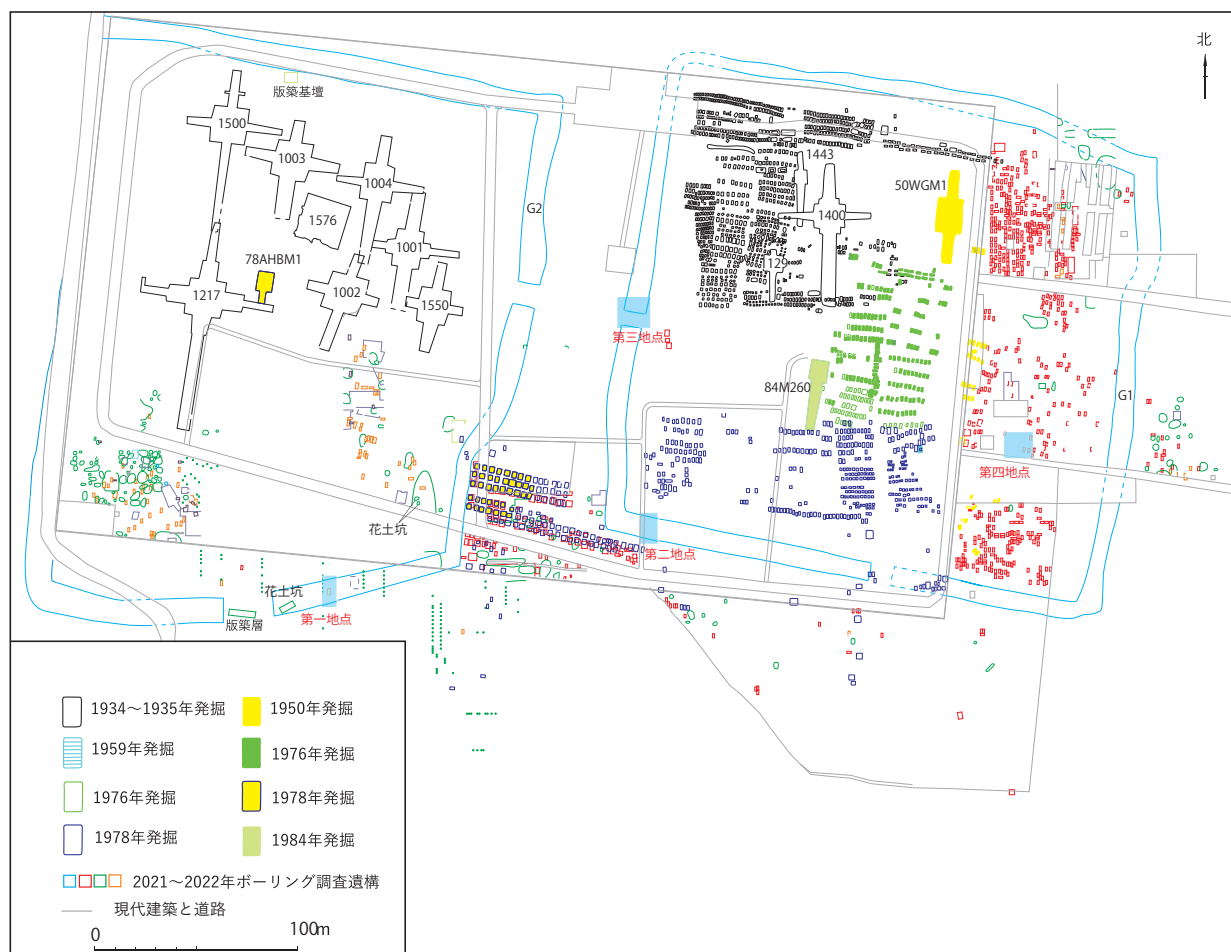


図16 殷墟王陵区

〔中国社会科学院考古研究所安阳工作队 2023: 図2〕より一部改編

³¹ 発掘調査により確認できる族邑の単位としては、2002年発掘の徐家橋北、2004年の大司空南、2010年の劉家莊北地、2020年の邵家棚などが典型的とされる〔何毓璽 2022: 26〕。

棄後の殷墟の王都は、都市建設の当初から、二里頭の王都に見られる格子状区画のような本格的な都市計画があったとは思われない。

なお近年、殷墟遺跡の北約10kmの場所に、大規模な青銅器工房をともなう辛店遺跡が発見されて注目される。同遺跡では「居葬合一」の現象も見られ、遺跡全体が一つの族邑ではないかと考えられる。出土した青銅器銘文の「族記号」から「戈」という名前の族的集団の族邑であることが推測される〔安陽市文物考古研究所 2021〕。辛店遺跡は従来知られる殷墟遺跡の範囲の外にあることから、殷墟の「都城圏」を構成した特定の役割を担って配置された族邑の一つと理解できるかもしれない。

殷墟遺跡ではまた、洹河北側の西北岡において王陵区が発見されている〔Mizoguchi・Uchida 2018〕〔飯島 2022〕。亞字形墓と呼ばれる四本の墓道をもつ王墓とされる大墓8基をふくむ墓地で、ごく最近になって東西二つの墓群それぞれを囲んだ大規模な周壕が確認されて注目される〔中国社会科学院考古研究所安陽工作队 2023〕（図16）。王陵区には大墓の周囲に整然と並んだ3,000基近い祭祀坑（人間、動物の犠牲坑）が発見されている。殷王朝後期の二百数十年の期間に、宮殿・宗廟区における朝廷儀礼としての祖先祭祀とは別に、父祖の墓前で定期的におこなわれたであろう祭祀の遺構と考えられる。王陵区は王都の西北縁辺部に位置するが、王都の都市空間はこの王陵区を構成部分として組み込んでいた。王陵区における祭祀活動も、新発見の周溝から見る限り、外部に対して閉じた空間を意識していたと考えられよう。

洹北商城をふくむ殷墟遺跡群ではこれまでに地上に屹立した城壁構造は確認されていないが、洹北商城、小屯村付近の宮殿・宗廟区、西北岡の王陵区などでは周囲を囲んだ大規模な周壕が造営されていた。祭祀関連の施設は周壕の内側に配置されていて、外部に対して閉じた祭祀の空間をつくりだしていたと考えられる。

4 周原遺跡（西周王朝の王都）（前1050年頃～前771年頃）

殷、周の武力による王朝交代によって誕生した西周王朝では、これまでの発掘調査と伝世文献を参照して三つの王都が相ついで建設されたと考えられる。すなわち陝西省扶風県・岐山県の県境一帯に所在する周原

遺跡（周原）、陝西省西安市西郊に所在する豊鎬遺跡（豊邑・鎬京）、河南省洛陽市街地一帯に分布する西周遺跡群（洛邑（成周））の3カ所の都市遺跡がそれぞれである（73頁、図26参照）。『史記』をふくめた伝世文献によれば、「周原」は周の一族にとって王朝成立以前から続く都市であり、「豊鎬」（東西に隣接する豊邑と鎬京を一体的にとらえた呼称）は殷を滅ぼす前後に建設された王都である。そして、「洛邑（成周）」は殷を滅ぼした直後から旧殷王朝勢力圏の中心から遠くない場所で建設がはじまった王都であった。三つの王都のうち、考古学的に都市としての全体像がある程度読み取れるのは周原遺跡である。

現在の周原遺跡の土地に、周の人びとがはじめて定着したのは殷王朝後期の時期であり、西周王朝開始の頃には宮殿・宗廟やそれを内部にふくむ城壁が築かれるなど王都のすがたを整えていったようである。王朝成立前後に周原の東方に第2、第3の王都である豊邑・鎬京、洛邑（成周）が建設されても、周本願地としての周原の王都が衰退することはなかった。周原はおそらく周王室の宗廟の地として位置づけられ、有力臣下の貴族層も周原に居地をかまえるものがあり、さらにもとは殷王朝に従った氏族的集団の一部も周原の王都に移住するなど、周原は西周王朝成立後も重要な地位を維持した。

周原遺跡は東西約6km、南北約5km、面積約30km²の範囲に広がる。その範囲内には現代の自然村20余りがふくまれる。渭河（黄河の支流）北側の黄土塬（黄土台地）に所在し、遺跡の北側は岐山南麓に接している。この一帯は、1970年代に岐山県鳳雛村の宗廟建築と建築内に埋納されていた大量の西周甲骨文が発見され、また付近では多数の窖藏青銅器（土坑内に一括埋納した青銅器群）が相ついで発見されて注目を受け、古公亶父^{ここうたんぽ}以来の周の拠点の地であると推測されて「周原遺跡」と呼ばれるようになった〔北京大学考古文博学院ほか 2002〕〔雷興山・種建榮 2014〕〔西江 2019a〕〔種建榮 2023〕〔周原考古隊 2023〕（図17）。

遺跡内の重要な発見としては、鳳雛建築群（宗廟とされる甲組建築址、社祀遺跡と思われるF3建築址など）、召陳村の大型建築群、雲塘齊鎮の祭祀建築群、広範囲に点在する「族邑」群（しばしば家族や一族の父祖の祭祀にかかわる窖藏青銅器をともなう）、各種の工房址が集中した齊家村北と莊白村周辺の2カ所の



図17 周原遺跡の概略 族邑群と内城・外城

[雷興山・種建栄 2014: 172] および [周原考古隊 2023: 9] より作図

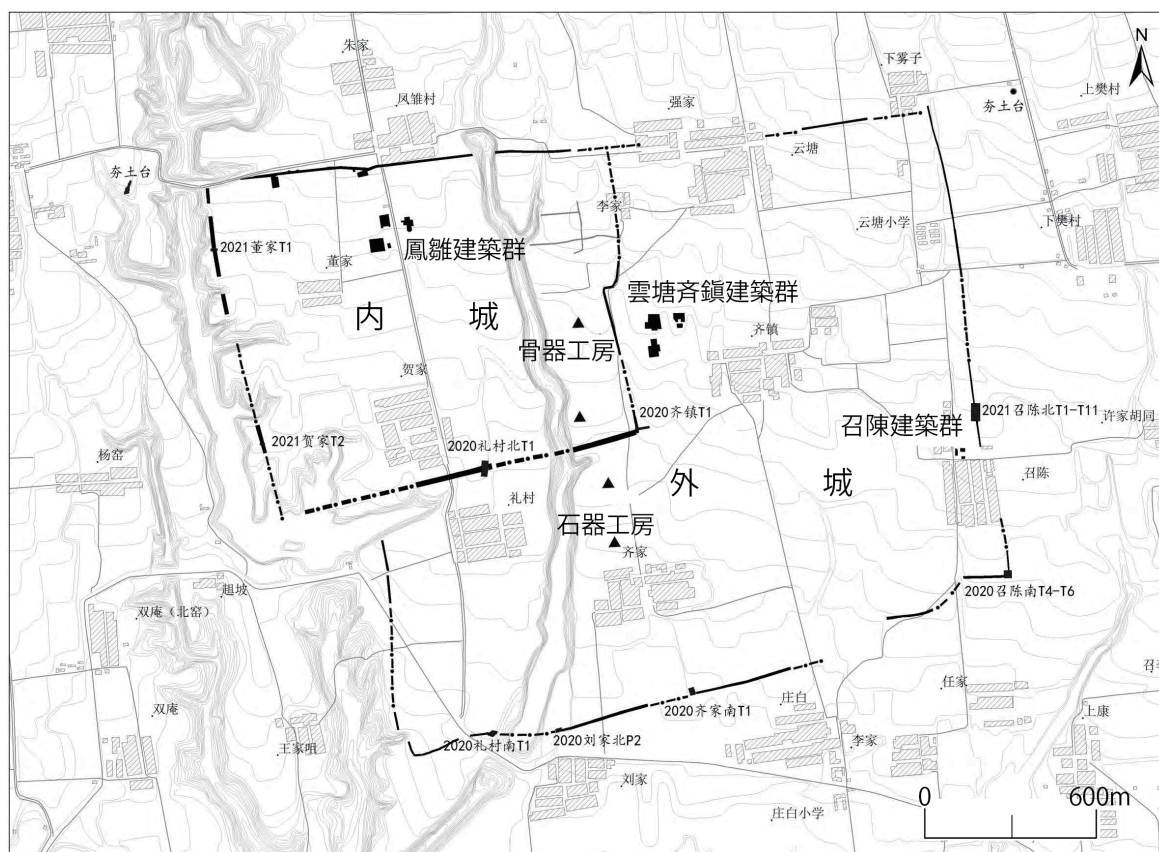


図18 周原遺跡の内城（小城）と外城（大城）

[周原考古隊 2023: 9] より一部改編

「工業区」[郭士嘉ほか 2021]³²、岐山由来の水源を利用した水系システム（苑池、渠）[西江 2019a: 131–134]などをあげることができる（図18）。筆者は以前、周原遺跡について、多数の族邑や一部の大型建築が集中した場所という以上には、計画性を見出しにくい都市の構成を想定していたが、近年、周原遺跡の各所を連結する水系システムがしだいに明らかにされ、その見方も変化した[西江 2019a: 128–134]。そうして2020～21年の調査において、はじめて都市を囲む内外の城壁（小城、大城）の存在が確認され、周原の王都のイメージは以前とは大きく異なるものとなっている。さらに最近になって、内城の中央北部に、長方形の城壁で区画された宮殿区（宮城）の存在も確認されている。

内城と外城はいずれも平面形はほぼ長方形で、内城は東西約1,480m、南北約1,065m、面積約175万m²あり、外城は内城を東側と南側に拡張するように築かれ、東西約2,700m、南北約1,800m、面積約520万m²であった[周原考古隊 2023]（図17、18）。年代の研究により内城は殷末ないし周初頃に建設され、西周王朝末期に廃棄されたとされる。一方、外城は西周王朝後期になって建設されたとされる。つまり内城は西周王朝の全期間にわたって使用されたが、外城は西周王朝の終わり頃に建設されたものであって、当初の都市計画にはなかった構造物ということになる。また内城内にはさらに宮殿・宗廟区を囲む牆垣が存在することが推測されてきたが[周原考古隊 2023: 注4]、最近になって内城の中央北部に、東西794m、南北609mの城壁に囲まれた長方形の区画（面積約50万m²）が確認され、宮城（宮殿区）であるとされた。その北城壁は内城の北城壁をそのまま利用していた。南城壁の外側には城壁に平行する道路址や壕溝が検出されている。宮城建設の年代は、殷末周初より早くはなく、西周中期より遅くはないとされる。内城とほぼ同時期か直後に建設された可能性が高いようである[曹大志ほか 2024]³³。後章でもふれるように、王都中枢部の鳳雛建築群は、この宮城内の中央部に位置することが明らかになったと言えよう。

齊家村北の工業区（青銅器、石器、骨器）は、内城

内東南部から内城の外にかけて内城の東城壁にそって南北方向に展開しており、莊白村周辺の工業区は外城以南の外部に展開していたことがわかる。召陳村の大型建築群は、王都中央部の内城からは遠く離れて、外城の東城壁の内側付近に位置することがわかった。雲塘・齊鎮の祭祀建築址群は内城の東側外にあり、外城の内部に位置していた。鳳雛建築群は、宮殿・宗廟と社祀に関わる都市内の中枢部と思われるが、発見された内城の中央北部、宮城の中央部に位置しており、建築群の中軸方位は内城・宮城の方位とよく一致している。

周原遺跡の各所に発見されてきた窖藏青銅器とそれぞれの族邑単位のうち、内城内部に位置するものは内城西城壁内側の董家村の窖藏青銅器（いわゆる「裘衛器」群が出土）などごく一部であり、大部分の窖藏青銅器とそれぞれの族邑は、内城の外側、あるいは外城の外側に点在していたことが見て取れる（図17）。先述した殷墟の王都における宮殿・宗廟区と周囲の族邑群の分布パターンにも類似した王都の成り立ちと言える。

以上、初期王朝時代の王都遺跡についての概要を述べてきた。最後に王都の人口についても指摘しておきたい。最近の研究例として何俊謙による殷墟遺跡の墓地構成から詳細に分析した人口推計がある。それによれば殷墟の最盛期の人口は7万人余（4.5万～14万人の幅が推算され、およそその中央値にあたる）と考えるのが妥当とされる[何俊謙 2020]。かりにこれを参照して遺跡の面積から単純に推測すると、二里頭の王都では人口1万人前後、西周王朝の王都・周原では6万人前後を一つの目安として想定できるかもしれない。

V 小 結

陶寺遺跡の発掘を担当してきた中国社会科学院考古研究所の何驚は、新石器時代後期の早期都市と初期王朝時代の王都を念頭に、現代の都市計画家として知られるケヴィン・リンチの研究[Lynch 1981]を手がか

³² 周原遺跡の発掘担当者は「手工業園区」の言葉をもちているが、本稿では先述した殷墟遺跡の研究にあわせて「工業区」の言葉をもちいる。

³³ なお本稿執筆時点で、この宮城の正式な実測図は発表されていない。したがって本稿掲載の周原遺跡図にも宮殿区（宮城）は書き入れていない。

りとして、中国古代の都市に関する9項目の指標をあげ、陶寺遺跡と二里头遺跡とを具体例として比較している[何驚 2009]。

ここでは、何驚の言う9項目(以下の①～⑨)について、陶寺遺跡と二里头遺跡に限定せず、Ⅲ、Ⅳ各章で述べた早期都市と中原王朝の王都について全般的に比較しておきたい。

① 規則的な都市形態 新石器時代後期の早期都市のなかで中軸を意識した都市としては、陶寺遺跡に萌芽的なようすを指摘できる。一方、初期王朝時代では、二里头遺跡の道路網、宮殿・宗廟建築などで、中軸と方位についての意識が非常に明確に現れている。

② 排他的な宮殿・宗廟区 早期都市では明確に宮殿・宗廟と呼べる建築は確認されず、また大型の建築物は排他的な(閉じた)構造をもたないようである。一方、初期王朝時代の王都遺跡では宮殿・宗廟区の使用は明確で、牆垣で囲まれた「宮城」を構成し、さらに宮城内部の宮殿・宗廟建築自体も土塼と回廊によって閉じた構造であることが一般的である。

③ 排他的な王族墓地 新石器時代後期では王族墓地の使用自体を明確にしえないが、早期都遺跡で最高位の墓は、陶寺遺跡の例では一般の共同墓地と一体的であった。また、良渚遺跡では牆垣などのない、開かれた高台上に高位者の墓地が造営されていて、排他的とは言えない。一方、初期王朝時代では殷墟遺跡において王陵区が知られるが、王陵区の周囲は周壕で囲まれており、牆垣こそないが一定の排他的な構造はあった。ただし、定期的におこなわれたであろう王陵での墓前祭祀は比較的規模の大きなもので、王族以外の族的集団の参集者も相当数にのぼったと思われる(後述)。

④ 排他的な祭祀区 早期都市ではそれぞれに違いはあるが、おおぜいの参集者を予定した開かれた祭祀空間が用意されていた。一方、初期王朝時代では宮殿・宗廟区の使用空間において王室の朝廷儀礼がおこなわれた。殷墟の王陵における墓前祭祀においても、墓域の周囲に外部との境界となる周壕を築くなど、祭祀空間には排他的傾向が見られた。

⑤ 官営手工業工房区 早期都市においても玉器、石器、骨器、早期銅器など手工業の発達は確認されるが、工房区の組織的な配置などは定かでない。一方、初期王朝時代の王都では、小規模で自給的な工房とは別に、「工業区」を設定して生産体制の管理をすすめ、集約化と工房間・工業区間の連携による生産の効率化

を図ったことが推測される。

⑥ 政治・宗教によって独占された大型倉庫 早期都市の良渚遺跡では大型穀物倉庫の倒壊現象が指摘されている。一方、初期王朝時代では偃師商城で倉庫址が確認されている。宗教センター的な傾向がつよい早期都市においても、政治的中心の傾向がつよい中原王朝の王都においても、穀物倉庫はそれぞれの目的において必要とされたようである。

⑦ 計画された道路と城門 早期都市のうち石峁遺跡では防御を明確に意識して建設された城門遺構が見られる。また石峁遺跡と陶寺遺跡では断片的ながら道路址も発見されている。初期王朝時代では、二里头遺跡における東西南北に交差する道路網と道路両側の牆垣が都市を計画的に区画する構造として顕著な例である。殷墟遺跡と周原遺跡においても道路址は発見されている。なお、何驚の9項目にはないが、都市における水系システムも重要である。長江流域の「水城」である良渚遺跡や石家河遺跡では、水路は道路にかわる主要な交通手段であった。また、大規模な洪水対策のダム施設や給排水の渠・貯水池なども建設されていた。初期王朝時代の王都では、都市周辺の中小河川や湧水を利用した給排水、苑池(貯水池)の造営などが進められていた。

⑧ 明確な計画都市の思想 早期都市でも初期王朝時代の王都でも都市計画が全くないということはない。良渚遺跡では都市建設の早い段階で短期間のうちに都市の骨格が完成されたとされる。石家河遺跡の早期都市は屈家嶺文化期から石家河文化期へと時間をかけて成長した例であり、都市の骨格自体は段階的に整備されている。石峁遺跡と陶寺遺跡の早期都市においては、早い段階で都市の基本骨格が完成していたようである。短期間で都市の骨格を決定したことはそこに一定の計画性を見ることができよう。一方、初期王朝時代の王都は、いずれの王都も建設前には集落分布が稀薄でほぼ空白に近い土地が選ばれて、そこにあらたに都市を建設したものである(後述)。結果として王都は建設の当初から高い計画性をもっていた。ただし、各王都が継続した数百年の歴史のなかで、都市を構成した「族邑」単位が増加し、族邑内の人口も増加することによって都市の構成は大きく変化した(後述)。

⑨ 多様性のある都市文化の様相 新石器時代後期の早期都市は、等質的な「地域」に誕生した中心であることを繰り返し指摘したが、新石器時代後期すでに「地域」の枠をこえた文化の交流は盛んであり、関連

して人の往来、戦争などに起因する人の移住なども推測される。ただし、早期都市における都市住民の多様性は、住民の出身地域として推測される地理的広がりにおいても、交流した人、モノ、情報の量においても初期王朝時代に比べて限定的であった。初期王朝時代では、中原王朝の形成における広域を巻き込んだ地域間関係の再編成を背景として、王都に集まる人、モノ、情報の多様性とその量が、新石器時代より格段に増大したことは明らかである。また夏、殷、周の王朝交代によって元来文化的背景の異なる前王朝の集団が、新王朝の王都に「族邑」をつくって居住した現象も指摘できる（後述）。さらには、各王朝の開始以前における征服戦争などにより服属した、出身地域や文化的背景の異なる集団もまた、誕生した王都のなかに居住地を得て、それぞれの族邑をつくることがあったと考えられる。

以上、何驚が提唱する9項目について筆者なりに確認してみた。これをふまえつつ、早期都市と中原王朝王都の基本的性格について、いま一度要点を整理しておく。

(1) 新石器時代後期の早期都市

- ① 「地域」的社会的中心であった。
- ② 大規模な祭祀の空間をつくり、地域の宗教センターとしての性格をもっていた。
- ③ 祭祀の空間は一般的に外部に対して開かれており、おおぜいが参集する公共的な場となっていた。
- ④ 大規模な城壁や環濠、水系システムなどの建設は、宗教的行為としての協業によって進められた場合があった。

(2) 初期王朝時代における中原王朝の王都

- ① 華北・華中の広域を巻き込んで再編成された地域間関係により、地域間関係の「中心」地域となった中原王朝政体の首都であった。
- ② 王朝の政体自体は新石器時代以来の「地域」的枠組みを色濃く残すが、広域を巻き込んだ「地域」相互間には、「中心」「周辺」の関係性が生まれており、王都はその中心「地域」の中心拠点であった。
- ③ 王都は、人口稀薄な空白に近い土地を選んで新規に建設された。
- ④ 「地域」の宗教センターとしての性格は希薄であった。
- ⑤ 一般に宮殿・宗廟区、祭祀区などは牆垣などで囲

まれ、重要建築も土塼と回廊をめぐらせるなど、祭祀関連の空間では開かれた公共性が希薄で、閉じた空間を構成していた。

- ⑥ 都市の構造の一部には、ときに厳格な中軸や方位の意識が認められ、計画都市としての性格が指摘できる。
- ⑦ 都市を囲む城壁（外郭城）は、当時の歴史的状況によって、建設する場合も建設しない場合もあった（許宏の「大都無城」）。
- ⑧ 大小さまざまな族的集団が集住する「族邑」単位から構成されていた。

本稿後半の以下の各章では、初期王朝時代における中原王朝の王都の性格について、いますこし詳しく論じてみたい。VI、VII章では、上記(2)の⑧について取り上げ、王都を構成した族邑の性格と、族邑の人びとを結束させていた背景にあるものを考える。また、VIII、IX章では、上記の(2)の①、②、③について取り上げ、王都のもつ中心性と政治的性格について確認する。

VI 王都を構成した「族邑」群

中原王朝の王都は、宮殿・宗廟区や官営の工業区を除いた空間は、基本的に「族邑」と呼ばれることの多い「族的集団」の居住単位から構成されていた。族邑の実態についての理解は研究者によって違いがあり、またこの用語を使用しない研究者も少なくないが、初期王朝時代の都市や集落を研究するうえで有効な概念と考えられる。本稿で言うところの族邑とは、氏族的集団、あるいはそこから分岐した同氏族の小集団または家族的集団（これらを総称して族的集団と呼んでおく）を構成員とする大小さまざまな規模の居住単位のことである。近年、初期王朝時代の都市の研究では、そうした族的集団の居住単位が、しばしば墓地や手工業工房をともなった自立的な一つの集落に近い単位となっていることが注目されている。

初期王朝時代においては社会のあらゆる場面において大小の族的集団が社会の基本的単位となっていて考えられてきた。むろん都市の外部に展開していた一般的な中小集落もまた、基本的には一つひとつが族的集団を主体とする単位であったと考えられる。このような集落もまた族邑の単位である。殷、周時代において族的集団が所有した宝器である青銅器には、しばしば氏族の象徴である「族記号」が鑄込まれていた。同

じ「族記号」をもつ一つの氏族的集団では、同族内のある一部集団は王都内の族邑に居住して王朝の官職を担い、また同族の別の集団は畿内の地域（後述）にある一族の族邑（采邑と呼ばれる一族の経済的基盤となる本拠地）に居住して農業その他の生産活動をおこない、さらにある集団は王都の遠隔地に「封建」されて諸侯国を形成することがあった。族邑という概念は、血縁の紐帯を背景としたこのような国家構造を説明するためにも有効であろう³⁴。以下では王都を構成した族邑について考察するために、比較的良好な考古学的データがあり、発掘担当者らによる議論もなされてきた二里头、殷墟、周原の三つの王都遺跡について取り上げる。

1 二里頭の王都を構成した「族邑」群

二里头遺跡に関しては近年、都市の内部が「居葬合一」と呼ばれる、ある集団ごとに居住地と墓地がひとまとまりになった単位によって区画されていたとする見方が、発掘担当者により示されている〔趙海涛 2020、2023〕。すでにふれたように、同遺跡では2000年以降の発掘調査によって、宮殿・宗廟区を取り囲む牆垣が確認され（宮城）、さらにその牆垣の外側には「井」字形に東西南北にのびる道路網と、道路の両側にそって築かれた牆垣が確認されている（52頁、図11）。「井」字形グリッドの中央の区画が宮殿・宗廟区であり、その北側のグリッドが祭祀区、南側のグリッドが官営手工業工房区と推定されている。そして宮殿・宗廟区の西北側、東北側、西側、東側、西南側、東南側の各グリッド内には、断片的ではあるがこれまでの発掘成果を総合して、生活の場と墓地が一体的になった「居葬合一」的なまとまりが形成されていたと指摘されている〔趙海涛 2023〕³⁵。本稿ではこうしたまとまりを族邑と呼ぶことにする。二里头遺跡で発見される各種の墓群は、これまでに大面積の墓地としては知られていないが、墓群における墓の配列には秩序が見てとれ、発掘報告者は父系の家族墓地〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 103〕、あるいは単に

家族墓地〔趙海涛 2020: 112〕という推測を述べている。宮殿・宗廟区の西北側グリッドにおける最近の発掘では、（高級建築の）建築基址、一般的な住居址、貴族墓（青銅器や玉器を副葬）、平民墓（土器のみ副葬、あるいは副葬品なし）、さらにより下層の（おそらく王都本来の成員ではない）人物が土坑に埋められた埋葬が、比較的狭いひとまとまりの空間の中に確認されている〔趙海涛 2020: 113、2023: 13〕。道路とその両側の牆垣により、明確に分けられた都市内の一つひとつの区画が、一つの階層秩序をもつ氏族的集団の集落単位をなしていたように推測されるのである。こうした状況は、宮殿・宗廟区の東側、南側、東北側、西南側、西側の各グリッドでも見られるという〔趙海涛 2020: 112–113〕。宮殿・宗廟区南側のグリッドは、おそらく官営の手工業工房区であって、青銅器や緑松石の工房群とその近傍の生活址との一体性が指摘されている〔趙海涛 2020: 113〕。中小の工房は、ほかにも骨器、骨角器、石器、土器に関わるものが都市内のその他のグリッドに分散して見出されている。これら各種の工房群と族邑単位との間には結びつきがあると推測される。

2 殷墟の王都を構成した「族邑」群

殷後期の殷墟遺跡では、以前から「族墓地」の名称で呼ばれる族的集団を一つの墓域に埋葬したと思われる現象が数多く指摘されてきた。例えば殷墟西区として知られる939基の墓群〔中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1979〕〔中国社会科学院考古研究所 1994: 121–128〕について、発掘報告では西区全体を8つの異なる墓区に区別し、それらは8つの異なる「族」の墓地であると解釈した。殷墟西区の族墓地をめぐっては、その後多くの議論がなされ、唐際根による総合的な研究では、西区は10区の墓区に分かれており、その墓区はさらに数基から数十基の墓が集合した小墓群に分かれ、それぞれは家族的墓群の単位と考えられた〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 303、336〕〔王震中 2010: 8–9、353–359〕。

34 松丸道雄が提唱した邑制国家論では、殷の国家の基本構造として大邑一族邑一属邑の3段階を考えた。のちに同氏は考古学上の新知見を勘案して一部修正し、あらためて大邑—大家族邑—小族邑—属邑の4段階の累層的な構造を想定している〔松丸 2001、2003: 134–136、2024〕。邑制国家論における族邑と、本稿における都市を構成した居住単位としての族邑という考え方は、族的集団の集落地という点で共通する概念である。これらを整合的に説明することで、中原王朝の国家と王都の構造的な関係について本稿が論じていない別の側面が見えてくるであろう。今後の課題としたい。

35 後述するように「居葬合一」とは、もともとは住居と墓地が折り重なるように稠密な立地についての呼称であるが、二里头遺跡で言われているのは、住居と墓地は分離していても、互いに近傍にあってまとまった集落を構成している状況のことと思われる。